

昔 今 野 木 串

二 纓 南 竹

力 南 竹

はじめに

「串木野市」は「日置郡市来町」と合併し、平成 17 年 10 月 11 日(火)に「いちき串木野市」となりました。串木野今昔は旧串木野市について書かれています。

父（南竹 纓二、1914 ～1988）も串木野の漁師として漁労に従事しながら、多くの日記を残した。50 歳を過ぎた頃から少年時代の思い出や本浦地区の風習などを随筆「思い出」として書き留めてくれた。

筆者が故郷の思い出を記録し始めたのはインターネットの普及により 1995 年頃、自分のプロフィールのページに出身地の紹介をしたのが最初である。今でも故郷の情報を発信している。

第 1 章は父が家族に残してくれた随筆「思い出」より、父が育った串木野の本浦地区の大正から昭和の時代の行事、風習などを編集したものである。

第 2 章は戦後の昭和の時代、筆者が育った串木野の本浦地区を中心とした行事、少年時代の思い出を書いたものである。

第 3 章は明治の頃に串木野の漁師達がカジキ、マグロを追い、朝鮮沖に出漁したころから、長崎県五島の「さのさ節」を源流として、唄い伝えられてきた民謡「串木野さのさ」を紹介したものである。

第 4 章は近年まで恵比須神社に大漁を祈願するための奉納相撲「漁願(ぎょがん) 相撲」が行われてきた。その時に土俵上で唄われてきた相撲甚句を紹介したものである。

第 5 章は昭和 35 年頃まで串木野近海での一本釣り漁労に使われてきたさつま型和船（帆船）を調査し、記録してきたものである。

南竹 力

平成 20 年 12 月

目 次

第1章 串木野今昔（大正・昭和）	1
1-1 漁願相撲（角力）	1
1-2 串木野漁港の築港	2
1-3 漁夫の腰巻き	4
1-4 薪担（べらいね）	4
1-5 中尾水汲み（みっくん）	5
1-6 三隅畠（みすんばたけ）	5
1-7 集い（よい）	6
1-8 鬼火焚き（おねっぼ）	6
1-9 十五夜の綱引き	7
1-10 貧農のせがれ	8
1-11 小学校時代の思い出	9
1-12 平江の大火	10
1-13 本浦地区の苗字の由来	11
1-14 本浦地区の屋号	12
1-15 「しんぐわさんち」と講摩	15
1-16 御幣(しべ)立て	16
1-17 肝付どんの枇杷	17
第2章 串木野今昔（昭和・平成）	18
2-1 一本釣り帆船	18
2-2 五反田川	19
2-3 浜ん馬場	20
2-4 ロータリー	21
2-5 串木野駅	22
2-6 中央公民館	22
2-7 祇園祭（おぎおんさあ）	23
2-8 漁師の編み物	24
2-9 漁師の気象予報	24
2-10 親子ラジオと漁労情報	25
2-11 恵比須神社の六月灯（ろっがっど）	26
2-12 ルース台風	27
2-13 水揚場	28

2-14	本浦公民館	29
2-15	市（いち）の賑わい.....	30
2-16	小学校の運動会.....	31
2-17	銭湯（風呂屋）	32
2-18	ガルどんのダゴ投げ.....	33
2-19	肥後守	33
2-20	陣取り「カイグンユウギ」	34

第3章 串木野さのさ 36

3-1	串木野さのさの由来.....	36
3-1-1	カジキ、マグロの延縄漁	36
3-1-2	鯖(さば) 釣り	37
3-1-3	五島さのさ	38
3-1-4	串木野さのさ.....	39
3-2	民謡「串木野さのさ」	40

第4章 「漁願（ぎょがん）相撲」 43

4-1	漁願相撲.....	43
4-2	相撲甚句.....	44

第5章 串木野の小型和船（帆船） 48

5-1	串木野の小型和船（帆船）	50
5-1-1	串木野の小型和船の特徴	50
5-1-2	ミヨシ.....	51
5-1-3	和船のヘルムとヒール	52
5-2	船 体・ 艀 装	54
5-2-1	和船の構造	54
5-2-2	機 帆 船	59
5-3	舵・帆	60
5-3-1	舵.....	60
5-3-2	帆.....	61
5-4	漁 労.....	63
5-4-1	キャビン	63
5-4-2	漁労海域.....	64
5-4-3	山当て.....	65

5-4-4	気象予報	66
5-4-5	釣りの所作	66
5-4-6	餌入れ（エッパン）	67
5-4-7	係留地	67
5-4-8	漁労着	67
5-4-9	ト マ	68
5-4-10	食 事	68
5-4-11	ランプ	69
5-5	和船の構造と造船技術	70
5-5-1	船体構造	70
5-5-2	船材と船大工道具	71
5-5-3	ネイタ・ナカイタの曲げ、カワラとの接続、コベリの取り付け	72
5-5-4	造船儀礼	74
5-6	串木野最後の薩摩ミヨシ型帆船（機帆船）	74
あ と が き		78
参考資料		79
掲載写真資料		79

第1章 串木野今昔（大正・昭和）

南竹 纓二

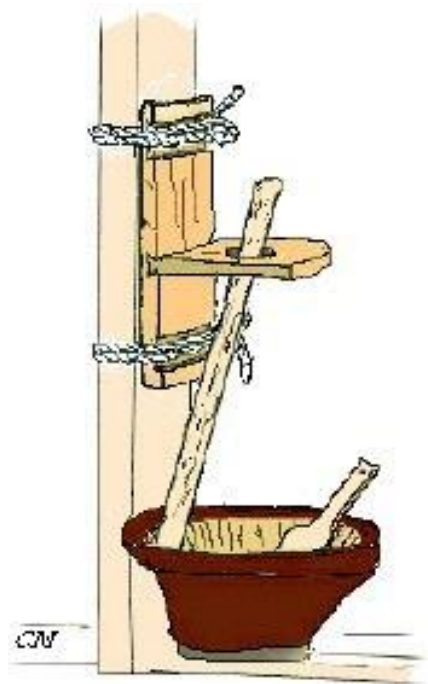
1-1 漁願相撲（角力）

大概、日曜日を選んで実施された。土曜日に学校から帰ってくると、どの家からも漁願相撲に持ってゆく手料理の匂いが地区一帯に漂っていた。帰宅すると父と母はつけ揚げ（薩摩揚げ）のすり身を直径50センチ位の大きな播り鉢に入れて一所懸命播っていた。目ほがし（板をT字に組み合わせ、真ん中の板に穴が空いたもの）を柱にくくりつけ、長いすりこぎ（播り棒）をさしこんで播っている。播り鉢が動くので一人は播り鉢を押さえ、一人が播ったり、両人で片手は播り鉢を押さえ片一方ですりこぎを握って回してやる。

早速、私も播り鉢を押さえて加勢する。夕食までにこれを揚げ終える。温かいつけ揚げを試食するととても美味しかった。夜になると母は昆布巻きをして大きく切った大根、ニンジンなどを煮しめていた。父はその傍らでハンペンを焼いている。煮しめの匂いとハンペンの卵の焼ける匂いが何とも言えなかった。私と弟が床に入った後も父と母は夜中の1時まで明日の準備をしていた。上名と島平から親類が毎年、相撲見物に来るので料理も相当な量だった。明日の祝いに貧しくても全てを叩いて取り組んでいる平和な家庭の姿を今でも思い出す。

漁願相撲が始まったのは大正13年頃、帆船の五丁櫓時代から機帆船にかわった頃からだと思う。帆船時代は各船が一年中それぞれ不定期に帰郷していたが、動力船になって仕事に区切りがつき、夏場の魚の値段が安く、漁も少ない時期は動力費も考えなければならなかったので5月頃から8月まで休漁期とするようになり、その頃から始まったものと思う。

漁願相撲の朝になると私たち子供は座敷取りに行った。それも早朝3時には行かないと良い場所は確保できない。名前を書いた杭4本と荒縄、莫塵をもって行き、少しでも土俵正面を争ってとった。真正面の一番良いところは夜中12時頃来て、そこに寝ころんで番をしている人もいた。番をしていないと後から来た人に杭を抜かれることもある。大概、隣近所の人で早かった人が広く場所をとって譲ってくれた。帰宅して一眠りしてまた行ってみると大分、位置が変わっていることもあった。このような本浦（地区）を挙げての盛大な行事が太平洋戦争が始まる頃まで毎年続いた。



私も20歳の時、朋友47名の中から、甚句の歌い手として12名の中に選ばれ、晴れの土俵の上で自作の肉弾三勇士の戦死の模様を甚句にして歌い、観客の喝采を浴びたこともあった。

漁願相撲に花を添えたのは満20歳になった地元出身の娘たちが奉公先から縁付き一時休暇（えんづきいとま）といって漁願相撲の日は帰郷し、来客の接待、その他で相撲場の花道を往来していることだった。

敗戦後、本浦の漁業が軌道に乗るまで10年近く要した。船隻も戦前の8割近くに達し、予想以上の水揚げをするようになった。漁願相撲復活の声が高まり、昭和33年夏、戦後、第1回の角力大会が行われた。市は戦後、都市計画を実施、夷ヶ丘の墓地も木原墓地に移転して公園化して3年余経過していたが、ここが相撲会場として整備が行われた。

戦前は本浦青年会主催、漁業会後援で行われていたが、戦後は青年団主催、漁業協同組合、船主組合、船員組合後援で開催された。各船は強制参加でなく自由参加ということだったが、全船帰港して参加した。取り組みには団体戦があり、主な団体は船主組合、船員組合、漁労長会、機関士協会、無線士協会で、トーナメント方式で優勝旗争奪が行われた。また各部落対抗など一日中賑わっていた。

1-2 串木野漁港の築港

大正11年頃、先進地の漁村では漁船の機動力化が急速に進み、枕崎ではもう半数以上が機動力化された。串木野でも発動機メーカーが説明会を開き、漁業の近代化を呼びかけていた。村議会なども各メーカー工場や先進漁港を視察したりして、漁船の近代化に伴う串木野漁港のあり方を協議することになった。

漁港の開港については議会及び地元には異なった意見があり、一つは天然の良港である川を浚渫して漁港とする。もう一つは将来、漁船の大型化を考慮して外港をつくる。この2つの意見は本浦でも2派に別れ対立することになった。本浦地区の対立は深まるばかりだった。村民の意見も2分され、事態は険悪の状態となっていたが、地元の奥田、長谷場、両代議士の意見で政府に河川工事と港湾工事の両方を陳情することになり有志が上京した。



漁業関係者の動きに並行して有識者の間で築港期成同盟が結成され活発な動きをしていた。これらの築港運動の結果、大正15年、串木野港築港建設が国会で採択され、補助金88万円交付される。総工費205万円の巨額の費用で着工することになった。昭和2年、村及び本浦挙げて築港起工式が盛大に行われた。河川工事も将来進めるという国からの裏付けが取れたため、本浦も一丸となって築港建設に取り組んだ。

築港の基礎工事をしているクレーン船やその他の船が小さく伝馬船のように霞んで見え、忙しく動いている。この様子を勘場潟の波打ち際に立って静かに眺めていたが、あんな遠いところに防波堤を造って途方もないような港を建設してどんな大きな船が入るのだろうかと思議に思っていた。10メートル立方位のケーソン第1号が長崎鼻のドックで出来上がり、進水したときは、そのケーソンを万国旗で飾り、花火を打ち上げ、進水したことを憶えている。

総工費200万円以上で、このケーソン1基が5万円もするのだと聞いて、子供ながら大変なことだなと思った。父母よりこの築港は波村仁太郎さんが計画したそうだと聞かされていた。今になって当時の有識者の先見の明に感服し敬意を表している。開港後50年以上を経過した今、当時の有識者は全て故人となり当時を語ってくれる人はいないが、恵比須神社の一角に奥田栄之進、波村仁太郎両翁の頌徳碑が建立されていて2人の碑文の中に当時を偲ばせる。



1-3 漁夫の腰巻き

本浦青年会（戦前）の規範として、中頭（20歳）以下の青年会員は夏冬を問わず出船、入り船の際には必ず、褌と腰巻きで乗下船することとなっていた。もし、ズボンでもはいて乗下船したことが判ったら、その夏の幹部会に呼びつけられ、お目玉を頂戴するか、何らかの制裁を受けることになっていた。

このことは本浦の風習として、青年の日常生活の中に溶け込んでいた。夏場は白襦袢の小袖にサワイ（モスリン）の腰巻きで銭湯に通い、夕涼みに海岸を散歩していた。冬は着物を着ることが多かったが必ず、白ネルの腰巻きをしていた。腰巻きをするのに先ず必要なのは腰紐である。

この腰紐が若い男女の縁結びとなった。若い女性は奉公先で彼氏の腰紐を赤や黄、青と色とりどりのサワイ（モスリン）で作り、好きな男性に贈っていた。若い青年はその腰紐の数によって、どれだけ、もてるかのバロメータとなっている。漁閉期に青年達が集まると誰々から腰紐を貰ったと自慢話をしていたものだ。

何故このような風習が本浦地区にあったかという、次のような状況が風習を生み出した。昔、串木野港は砂浜だったため、本船が接岸できず、港の中央に錨を入れ、伝馬船で通っていたが、乗下船の際は必ず、伝馬船を砂浜に引き上げ、引き降ろすことになっていた。海岸は遠浅で小波もあり、伝馬船の上降には腰まで水に入らなければならなかった。この場合も年上の人たちは伝馬船に乗ったままで、若い青年の仕事だった。そのため、ズボンをはいては機敏な動作ができなかった。腰巻きと褌ならくると捲り動作が早くできたからであった。この風習は港が整備され、本船が接岸できるようになるまで続いた。いや、それ以後もしばらくは続いていたように思う。

1-4 薪担（べらいね）

戦前まで薪担は本浦地区の女性で行われていた。薪担を専門にしている女性達がいた。各家庭からの注文を受け、4、5名の女性がグループを組んで深田や宇都、冠岳などに行き、山の主に3銭か5銭（大正10年頃）支払って、山に入り切り払ってある枯れ枝を集め、自分で担えるだけ束ね（まいけ）、担い棒（やまおこ）にさして担い、本浦に持って帰り、10銭か12銭で売っていた。

新婚の若い女性達もこの人達について行き、薪担を覚えたいが、枯れ枝（べら）を要領よく積まないと、うまく束ねることができないし、担い棒にさし込むことができなかった。行きも帰りも慣れない山路を山草履を履いて肩に食い込む担い棒を右に左に変えて、汗だくになりながら、専門家に遅れまいとふうふう言いながら家路を急いで帰ってくると近所のうるさ方が寄ってきて、この薪は束が太とか小さい（こまんか）といって批評したもので隠れて涙を拭いた娘達もいたという。

1-5 中尾水汲み（みっくん）

本浦地区では中尾水汲みという花嫁に課せられた仕事があった。結婚初夜を明かした花嫁は一番鶏が鳴く午前4時頃起きて、まだ薄暗い中を、水桶（たんご）を担いで勘場（当時、家屋は無い）から恵比須ヶ丘の墓地を通過、中尾の田圃の中にある井戸に水汲みをしなければならなかった。

一辺2.5メートルの四角な深さ3メートル位ある井戸に長柄の柄杓でわずかばかり溜まっている水を水桶に満たし、水が漏れないように鍋の蓋を浮かして担って帰り、身近な親戚の家に行き水瓶を洗って水を満たし、また引き返して水を汲み、次の親戚の家へとまわり、2回も3回も通い、自分の家の瓶に入れるときは午前7、8時になっていた。

当時、本浦地区の各部落に専用の井戸があったが、お茶の水として使えなかったため中尾水がお茶水として使われていた。この中尾の井戸は深さが3メートル位に底に僅かしか溜まっていないが積み石の間から流れる水はとてもきれいで美味しい水だった。しかし、5、6人も水汲みに行くと水の溜まりを待って汲むので時間がかかり、暗い内に家を出て、人より先に行かないと何軒もの親戚には配れなかった。

水汲みの娘達の中で兼ねて薪担をしている娘は水桶の担い方ですぐ判ったものだ。薪を担っている娘の水は大きく揺れて（タツプンタツプン）、水のこぼれが激しかった。母も毎朝、この水汲みに通ったものだ。

1-6 三隅畠（みすんばたけ）

みすん畠というと、誰かがまた騙されたという風評があり、戦前までみすん畠に狐がいて人を騙すと信じられていた。みすん畠は現在の昭和通り島平道から小瀬に通ずる三角地域で通称みすん畠と呼ばれていた。そこには人肥のため池が多くあり、臭気を漂わせていた。周囲は畠と田圃で、遠く島平の方に瓦焼き工場が見えていた。ここを夜中に通る人がよく狐を見たとも言い、また誰々が騙されたとよく聞くものだった。

1-7 集い（よい）

昭和12年頃まで、本浦地区の各部落に集い（よい）という子供達の集会があった。満6歳から14歳までの男児が、自主的な規制の中で集団行動をしていた。小学校を卒業した子供を古頭、6年生になった子供が新頭といって、新頭がその子供会のリーダーとなっていていろいろな子供の行事を企画し進めていた。部落によって人数は違っていたが、厳しい規律の中で団結を固めていた。

その頃、部落のことを向（むき）といっていた。本浦地区には尻釜向（しかまむき）、竹釜向、新潟向（しんがたむき）、小屋向、勘場向、土佐向の6つの向きがあった。子供会は4つあり、子供の数が少ない尻釜向、新潟向きはそれぞれ竹釜向き、小屋向きに加入していた。子供会は40名ぐらいで、集会は毎週土曜日の晩に行われた。会員に規則違反はなかったか、小学生以上は親孝行したこと、叱られたこと、悪遊びをしたことなどを自ら一人一人話すことになっていた。それらのことについて頭の人たちが注意をしたり、お褒めを与えたりしていた。小使い銭も2銭までとなっているのを子供は正直なもので3銭使ったと報告、また、どこの向の子供と喧嘩したと報告し、注意を受けたり、叱られたりしていた。親の方から注意してくれと依頼される子供もいた。年中行事の主なものに正月の鬼火焚き（うねっぼ）、夏の十五夜の綱引きがあり、各向ごとに行われていた。

1-8 鬼火焚き（おねっぼ）

鬼火焚きの2週間前から、それに使う孟宗竹や雑竹を買うための準備をする。それは金を集めるのではなく、1人で20本当分の薪（たっもん）を集めることだった。自分の家から持ち出すのではなく、親戚や近所の家を廻って集めるのであるが、1軒より1本だけ貰うことになっていた。2人で組んで親戚を廻り、島平辺りまで廻った。島平では1軒で4、5本をくれるところもあったが、子供は正直なもので1本だけ貰って、組んだ



2人で5本位貰って島平道を担って帰った。3日で20本になり、頭の家を持って行く、とてもうれしかった。

その薪を頭の人たちが1把6本にして5銭位で売って歩いた。市価では7銭位するので、すぐ売れた。70把で3円50銭集まり、この金を持って天気の良い日曜日に3年生以上20名ぐらいで深田山に竹を買いに行く。孟宗竹1本が50銭、雑竹1把（約30本）が

40銭で6把買って持って帰る。弁当を持って行き、山水を飲みながら木陰に集まって昼食するのも一つの楽しみだった。

鬼火を焚く場所は、竹釜向きは平瀬、小屋向きは須之崎（現西浜町）、勘場向きは勘場潟（現浦和町）、土佐向きは恵比須ヶ丘、小瀬は長崎鼻と、その向きによって決まっていた。鬼火を焚く前日は櫓組みを総出でする。孟宗竹を中心にして雑竹周囲に立て廻し、縄で結わえ、孟宗竹の先端に日の丸の旗を付けて張り縄を四方にして倒れないようにする。灯油を少し買い、夜明けに火を付けられるように準備する。

準備は夕方に終わるが、夜明けまでが大変だ。それは他の向きの者が櫓を倒しに来るからだ。それも行事の一つになっていた。自分たちの方からも夜中に倒しに廻る。もし倒されたら次の日に昨晚はどこの向きの櫓が倒されたと本浦中にふれが廻り、子供会の恥になった。これを守るため、櫓の近く番小屋を造り、そこに火鉢を持ち込んで5年生以上は交代で寝ずの番をした。新頭の人たちは他の幹の櫓倒しに出かけ、追いかけられたり追いかけたり、番小屋に帰ると、どこの櫓の張り縄を1本切ったとか、捕まえられそうになったとか、どこが一番嚴重だったとか大にぎわいだった。

早朝、全員が集合、親たちも近所の人たちもそろそろ集まってくる。日の出の1時間位前に灯油をかけて点火される。パチパチパンパンと音を立てながら炎が上がる。ちょうど同じ頃、5地区でも燃やされるので、大火災のように夜明けの空を焦がした。実に壮観だった。中頃になり孟宗竹に火がつき大きな音を立てて倒れる。益々火の手が上がり火の粉が舞い散る。見物人からも一斉に歓声があがる。何とも言えなかった。

火が収まるとその中に餅を投げ入れて焼いて食べる。1時間半位で櫓の火が消えると、古頭の家で全員集まり、夜番をした人たちが夕べの見張りの様子や夜襲にいつて追いかけられた話を面白おかしく話してくれる。炊事場では頭のお母さん達が持ち寄った餅でぜんざいを作ってくれる。そのぜんざいの美味しかったこと、今でも忘れられない。

1-9 十五夜の綱引き

8月15日は青年会（団）の大綱引きの夜、各向き（部落）の子供会による綱引きがそれぞれの向きごとに行われていた。綱作りは親たちの責任で、その日の朝早くから集まってつくられ、子供達が起床したときは、綱が出来上がっていた。綱は部落の中央道路に延ばしてあった。

子供達は8時頃、綱のところに集合する。5歳から14歳までは白鉢巻きに金色の色紙で好みの模様を張り、固く締め、紺の着物にわら草履、そのいでたちが勇ましかった。5歳から8歳までは、金たらいを持ち、9歳から12歳までは油缶（1斗）の空き缶を持つ。13歳は漁船の大漁旗、14歳は法螺貝をもち年齢順に2列に並び、法螺貝を吹き鳴らすブーブーの音を合図に一斉に空き缶、金たらいをガンガン叩きながら行進、延べられた綱を一周する。海岸に出て青年会の大綱を一周し、他の向きの綱を廻って歩く。その日はブ

ーブー、ガンガンとても賑やかだった。竹釜向き、勘場向きは子供が多かったので特に賑やかだった。

他の向きの綱を廻るとき、絶対にその綱を越えてはならなかった。もし、越えたことが判れば部落同志の大喧嘩となった。また道路を廻って行進しているとき、他の子供会と出会うと道を譲らず押し合いとなり、先頭で小競り合いが起こる。できるだけ他の向きの行進と接触しないように道順を変えることもあったが、どの子供会にも喧嘩大将が2、3人はいて、わざと他の向きの綱を越えたり、行進が廻ってくる道を選んで待っていたりした。夕方頃より綱引きをして、青年会の大綱引きが始まる8時半頃終わり、引き続き青年会の大綱引きに参加する。

1-10 貧農のせがれ

堤 清市 --- 歯科医師（生福坂下出身、筆者の実兄）

洋服を着て靴を履いた人が通る。大人も子供も皆頭を下げ、靴の音が月給月給と聞こえた。洋服を着た人は学校の先生か偉い人だけ、女の先生は紫色の袴を付け、靴を履き、ハイカラだった。

夏になると農家では蚊いぶしの煙が部屋の中をもうもうと立ち込める中で、私はランプのホヤ掃除を行った。両親は野良仕事のほか、母は野菜やベラ（薪用の枝）を町に売りに行き、魚や日用品をなどを買って帰り、父は手車に薪を積んで、1束のタツモン（薪）と肥樽いっぱい黄金水の交換が行われる。私も2度、3度、父と一緒にいった。

学校から帰るとそのまま草刈りに行ったり、夕食の用意もした。それも米は僅かで唐芋が多かった。米が煮立つと粟を入れた。申し訳程度の夕食だった。

母はよく小麦粉と唐芋のネッタボ（団子）を作ってくれた。勉強は学校だけ、試験勉強などする暇はなく、朝から晩まで牛の世話をするのが日課だった。学校に行く前に朝露に濡れた草を刈り、濡れたままの着物で学校へ行く。ほとんど裸足が多かった。冬もワラゾイ（ワラ草履）か、すい（擦り）切れ下駄だった。

朝礼のとき、それを脱がされ、霜が溶けて足が冷たかった。夕方になると三井（金山）に勤めるキンザンボが古自転車に乗り、流行歌を得意げに歌いながら県道を通った。文明開化の電灯が農家を照らしたが、うす暗い16燭光だった。

私はニセコ（二才衆）に入って間もなく家を出て東京へ行った。限らない苦勞をして夜間商業と夜学の歯科医学校を卒業した。貧乏だった幼い頃の生活が私に不屈の闘魂を与えたのかもしれない。私は人に頼ることなく独力で今日の人生を築いたことに限らない誇りと自信を持っている。

1-11 小学校時代の思い出

--- 串木野小学校創立百周年記念誌より ---

木造平屋建ての校舎が校庭を挟んで東と西に建ち、西側の校舎に低学年の男子生徒が入り東側の校舎に低学年の女子生徒が入っていた。また、東側の南の端には裁縫室があり、北側に木造二階建てが並び高学年の生徒が入っていた。東側の1階に教員室と図書室があって、2階正面中心に二千人余を収容する講堂が威風堂々と建っており、大きさだけでなく何か威厳を感じた、それは天皇陛下の御親影が飾ってあったからだろう。講堂に入るには最敬礼して入ったことを覚えている。

講堂での体育行事は剣道と柔道だけが行われており、校庭は広々講堂を中心に東西100メートルのコートと、前面に楕円形になった200メートルのトラックがあり、全校生徒がどのような体育行事を行っても不自由はしなかった。コート周囲には10メートル間隔位にポプラやセンダンの木が繁り、二千名余の父兄が木陰を利用して運動会を観覧することができた。

当時は生徒間に貧富の差が甚だしく、分限者の家の生徒は洋服を着て鞆を肩にかけ、弁当箱を手にとって登校し、貧者の子供は緋の着物に人徳と言うチャンチャンコを上から羽織り、山草履を履き勉強道具一切を木綿の風呂敷に包み肩から斜に背負い、弁当はおにぎりに梅干を詰め高菜（漬物）の葉で包み風呂敷にまるめ、腹に巻いて登校していた。

当時はまだ士農工商の階級制度の余韻が残っていて、村役場に届出書類を出すときも士族と平民と身分を書いて提出した。士族は郷土として各地に分散していたが、何々どんと言われており、「何々どん」と言われるところは裕福で子供達も洋服を着て靴を履き、きちんと決まっていた。6年生を中心に登下校も集団でして校内でも一緒に行動していることが多く、偏見かも知れないが威張っているように見え、そのためか浜っ子達との喧嘩が多く、喧嘩は浜っ子達が強かった。ところがその子供達が負けて帰るとあくる日、卒業生5、6人が木刀を持って学校に押しかけてきたこともあった。麓には健児の社（舎）というのがあり卒業生達が毎晩、児童を集め剣道や柔道を教え児童の健全育成に努めており、学校でのその日の反省をしながら、浜っ子と喧嘩をして負けた報告を聴いた上級生が、あくる日学校に乗り込んで来たらしい、ただ、脅しに過ぎなかったが。

特筆すべき思い出は厳寒の朝講堂の前で朝礼を受けることだった。霜柱がバリバリ張り詰めた校庭に素足に草履を履いて集合し、長く立っていると草履の下から冷たい水が浸み込んで身振るいするような冷さが背筋を走り、あまりの冷めたさに我慢していて小便を洩らす生徒が何人かいた。足は感覚を失い、泣きたいような思いをしているのに、傍に運動靴を履いて平然としている生徒を見ると無性に腹が立って蹴飛ばしてやりたいような気持ちにかられた。

半数近くの貧しい児童が学用品も満足に揃えてもらえず、人の授業を羨ましげに見てい

る児童もいた。算数の時間に運算や試算を大学ノートにしている児童、算数ノートの片隅に試算をして消しゴムで消したり書いたりしている児童、図画の時間に普通の児童はクレヨンで絵を書いているのにクレパスを使っている児童などさまざまであった。せめて大学ノートだけでも1冊欲しかった、大多数の児童はそれが買えなかったように思う。

汽車が串木野駅で折り返し走っていた、汽笛が鳴ると大原の鉄橋の上に汽車の通るのを待ち、煙を被りながら見るのが登下校の楽しみの一つであった。卒業式にも紺の着物にチャンチャンコを着て参加した。洋服を着ているのは1クラスに2、3人しかいなかった。

自分達が卒業して60年、種々思い出は尽きないが大正時代の特色のある思い出を2、3書いてみた。

1-12 平江の大火

大正11年、私が小学2年生の10月頃だった。

夜中の2時頃、激しく鳴っている半鐘に。母も弟も驚いて屋外に飛び出した。近所の人達も騒いでいる。火事は竹釜向（部落）だと北に向かって走って行く。北の空は花火のような火の粉が舞い上がり、時々、自分たちの上にも火の粉が落ちてくる。各所を走る手押しポンプ車の手回しサイレンが近く遠く聞こえ、慌ただしく走って行く。

物見高いは江戸の花と言うが、物見高いのはどこの人も変わらない。まして火事ともなれば男も女も大人も子供も北へ北へ流れるように走って行く。父は留守で弟は恐いと泣いていた。私は母の止めるのも聞かず、大人の中にもまれながら、暗い中を北へ走った。竹釜向だと思っていたら、五反田川、川向かいの平江だった。塩田より先には行けなかった。

平江橋の手前から黒山のような人集りだった。大人達の間をかき分け一番前に進んだ。他にも子供達が相当いるようだった。西側5、6軒が燃えているようだ。北東に吹いていた風が北西に変わり最悪の状態になったらしい。もう手が付けられない有様だった。ボーボー、パチパチ、ガラガラ音を立てて東へ飛び火して行く。

見ているうちに東の空が白んでいるのに気づき、急いで帰った。母に大目玉を喰らった。怪我をして帰れないのではないかと心配していたらしい。ろくに寝付かれないうちに起こされ、朝食をそそくさとかき込み鞆を肩に家を飛び出すと平江の方に走った。平江橋は通行止めになっていた。黒山のような人がいた。学校行きの子供達が15人位見ていた。まだ所々、火の手が上がっていて、平江は1軒残らず全焼していた。皆、呆然として見ているようだった。

人垣の中を潜って先端に出て見ていたが、しばらくして周囲を見回すと学校行きの子供達はいないので慌てて学校へ走った。授業が始まって半時間ぐらい経っていた。遅刻の理由を言わなかったのも、その授業が終わるまで席の後ろに立たされた。

＜大火の原因＞

大火の原因はいろいろあると思うが、藁葺き屋根が2／3を占めていたこと、道路幅が1メートル位で、すばやく消火活動ができなかったこと、北西の風が強く五反田川の水が思うように使えなかったことなど、悪条件が重なっていた。

当時の村長、肝付 篤氏は火災に対する悪条件を解消するため、第1に藁葺き屋根を瓦葺き屋根にすべきだと、全村を瓦葺き屋根にするいろいろな施策を講じた。我が家も藁葺き屋根だったが、翌13年、瓦葺き屋根に新築した。本浦地区も半数以上が藁葺き屋根だったが、次々に瓦葺き屋根に変わっていった。平江地区は大火の教訓を活かし、思い切った区画整理を行い、道路の幅も広げられた。

1-13 本浦地区の苗字の由来

これは私の想像であり昔の老人に聞いた訳でもないがおそらくそうだったのだろうと思っていることを書いてみる。自分の祖先が竹釜部落であり南竹姓であったためでもあるが、終戦前まではその名前の人がその地区に多く住んでいた。本浦地区は北の方から尻釜（しかま）、竹釜（たけがま）、新潟（しんがた）、小屋（潟口）、勘場とあり、夷ヶ丘の東に土佐、寺下、浜崎という部落があった。また、遠く砂浜を隔てた南に小瀬（こぜ）があった。砂浜は埋め立てられ、現在の浦和町、新生町になっている。昔は部落のことを向き（むき）と言っていた。たとえば、竹釜向（たがまむっ）、小屋向き（こやむっ）と言う。

明治11年に一般平民に苗字が許された。その前までは屋号（渾名）を付けて呼ばれていた。私の父（南竹 善吉）も「チョコ善吉」と言っていた。屋号の由来については良くわからない。苗字を付けることを許されたとき、住んでいる土地にちなんだ苗字を付けたと思われる。

尻釜地区に住んでいた人は尻釜と付けた。竹釜地区に住んでいた人達は、その位置によってよって同じ苗字を付けたのが多い。この地区が本浦で一番住人の数が多かった。南側に住んでいた人は南竹、上側に住んでいた人は上竹、中程に住んでいた人は竹中、中竹、竹元、下側に住んでいた人は竹下、北側には後竹という名もあり、大竹、若竹という名もあった。また、五反田川添いに人が西川、川崎と付けている。次に新潟地区、ここは割合人家が少なかったが、ここも南新、北新、上新とあった。

小屋は昔、潟口という地名だったので、潟口、前潟、中潟、後潟、東潟、潟村があり、一番南側の勘場地区は夷ヶ丘の西側に位置していたので夷を付けた名が多い。勘場、上夷、中夷、下夷、前夷、後夷があり、夷ヶ丘の東側に土佐という地区があり、土佐、佐抜、帖佐という名があり、夷ヶ丘の北側に寺下、浜崎、中村筋という小字があり、この周辺では寺下、浜崎、中村という名が多かった。

また、小瀬地区には小瀬姓が多い。この他に屋号や名前から由来したと思われる長家、大高、岡野などいろいろな苗字が付けられてきた。今までの苗字の人に貴方の先祖は何々地区ですねと聞くと8割くらいは先祖の地区を当てることができる。

1-14 本浦地区の屋号

明治の初めの頃、平民に名字が許されるまで、平民は皆、屋号やあだ名で呼び合っていた。本浦地区でも最近まで、「どこそこの誰よ」という場合、屋号を使って説明することが多い。同じ名字でも屋号が違う場合は系統（親戚）が違う。また、名字が違う場合でも屋号が同じであれば同じ系統（親戚）である場合が多い。

あだ名は先祖の名前を付けたものも多いようだ。ちなみに我が家（南竹）は「チョコ屋」である。

屋号を部落名で分類してみる。

岳釜（たけがま）

今 尾	デンコ屋	浜 田	ソヤマ屋
上 新	太之助	前 村	スエド方
上 竹	七郎屋	松 元	ブジ屋
植 田	マンヅ屋	南 竹	カッチョン屋
後 夷	ヨカン下（シタ）店	南 竹	サンコ屋
内 村	イッチャ屋	南 竹	伝助屋
大 満	キツネ屋	南 竹	チョコ屋
川 口	ハンヅ屋	安 藤	
小 松	コマツ勘	北 山	
尻 釜	スヤドン	下 村	
竹 中	サツボ屋	竹 下	
岳 釜	徳下方	竹 中	
寺 田	ギン屋	中 嶋	
中 尾	十五（ジュウゴ）下方	中 竹	
西 川	仲兵エ屋	船 蔵	
浜 崎	ドンジ屋		

新潟（しんがた）

荒 田	タツカ屋	中 村	ゴチョ屋
上 新	オヤシデ屋	中 潟	フナヨン屋
上 新	ジンコ屋	中 潟	ゴゼ屋
上 新	ホカブイ屋	林	タンコ屋
上 新	梅ド方	浜 田	ソエモン屋
上 野	伝兵エ屋	福 田	チヨガメ屋
江 藤	オコシ屋	福 田	孫四郎屋
江 藤	ヨタ風呂屋	馬 越	馬ン子屋
川 崎	オゴ屋	南 新	辰兵エ屋
坂 口	ウサンゴロ屋	南 新	鍬ド方
坂 口	オツンナ屋	南 新	弥兵エ屋
竹 本	ヤッ兵エ屋	南 新	カワ屋
寺 田	オハ屋	南 竹	ゴソ屋
中 尾	サンパン屋	西 村	ガネ（ドン）屋
下 夷	マンブク屋		

小屋（こや）

安 藤	アンマ屋	潟 村	タゴ屋
今 尾	ゲンタ屋	寺 田	ゲンタ屋
今 村	カドヤマ	東 潟	ガラン屋
上 夷	ハヤタ屋	東 潟	タツモン屋
上 夷	長者権屋	東 潟	サツガン屋
上 新	五兵エ屋	前 潟	ソテツドン
上 新	バン内屋	前 潟	アメ屋
上 野	馬ン子屋	前 潟	カヘイ屋
後 潟	ゴケ屋	安 田	新聞屋
内 村	ボチャ屋	小 玉	
川 崎	タレクチ屋	平 石	
川 野	イッカン屋	間 瀬	
潟 野	ギン屋	吉 峯	
潟 村	ハンヅ屋		

勘場（かんば）

今 井	ゲンゴ屋	谷 川	イッペ屋
後 夷	セイジロウ屋	中 夷	伝五郎屋
後 夷	アサガオ屋	中 村	太之助屋
後 夷	コブ屋	波 村	トケ屋
上 夷	センタン屋	西	シンゴ屋
上 夷	ソッタ屋	羽根田	ハガマ屋
勘 場	オミセン屋	船 蔵	クァイ金屋
勘 場	ミツゴ屋	前 潟	セザ屋
勘 場	黒兵エ屋	松 元	シンゼ屋
坂 田	マスベイ屋	山 田	ソイノカラ屋
真 田	シンタ屋	岡 田	
下 夷	ノモト屋	神 崎	
藺 田	十郎屋	黒 木	
竹 浜	ヅモ屋	前 夷	

土佐（とさ）

栗 田	ヨンタ屋	西 村	ヅヨン屋
今 尾	ギンガメ屋	野 下	仁王ド方
大 里	ジュキッ屋	浜 川	ユメド方
岡 野	ノソ屋	浜 田	グワント屋
川 口	ホケ屋	早 崎	ヨマ屋
川 口	ゲンゼ屋	早 崎	チンチョ屋
勘 場	ツボ屋	船 蔵	ゲンゴ屋
北 浜	蔵屋	安 藤	
瀬 戸	半七屋	尾 高	
竹 中	タバコ屋	駒 寿	
土 佐	忠兵エ屋	津 田	
中 村	権十屋	鶴 田	
西	イッタン屋		

小瀬（こぜ）

江 藤	トツゾ屋	西 田	ボッケ屋
大 里	オヤシデ屋	浜 崎	ゴヘイ屋
小 瀬	殿様ド方	浜 崎	ホッポ屋
小 瀬	伝五郎屋	林	ウカゼ屋
中 村	権十屋	南 竹	サンコ屋
西 田	キッチン屋		

1-15 「しんぐわさんち」と講摩

本浦地区の浄土真宗門徒は4月3日にお釈迦祭りをした。それを「しんぐわさんち」といった。その日は奉公に出ている娘たちも帰郷し、盛大なものだった。4月8日が釈迦の誕生日で、他の地区では釈迦祭りをするのに何故、本浦地区は4月3日にしたのか若い頃から疑問に思っていた。本浦地区には5つの講摩があった。

この講摩というのは薩摩藩によって浄土真宗の信仰が禁止されて、人々が「隠れ念仏」と呼ばれる門徒になって結成した講のことである。門徒への弾圧も激しく大勢集まって説教を聴くこともできず、本浦では5つの講をつくり、個人の家の床下や地下室で仏を拝み、講話を聞いた。その講摩が1年に1回花見と称して一同に会したのが「しんぐわさんち」である。

釈迦の誕生を祝う会であるが、その日にすれば島津に睨まれるので、日を変えて行ったものと思う。本浦に分散している5つの講摩は「スヤ講摩（後夷）」、「伝造講摩（今尾）」、「荒田講摩（勘場）」、「新ゼ講摩（松元）」、「お東講摩（浜崎）」という。「しんぐわさんち」は、1つの講摩に老若男女、50名位が講摩名を書いた旗を先頭に三味線太鼓、手弁当を持って、まず、寺詣りして長崎鼻へ繰り出す。長崎鼻では講摩ごとに輪になって会が始まる。それぞれ輪をつくって、背中合わせになっているが、唄や踊りが出ると次第に輪が崩れ大宴会となった。

1-16 御幣(しべ)立て

毎週土曜日になると集い(よい)があり、その週に皆が会の規則を守ったかどうかを訊ねられ、制裁を受けることがある。小遣い銭は会で決まった額を超えていないか。友達と仲良くしているか、喧嘩はしなかったか等々、頭(かしら、6年生)より、一人一人聞かれると、子供は正直だから兄弟喧嘩をしたとか、1銭多く使ったとか、自分のことばかり言えどいのに、誰々は誰と喧嘩していたのを見たと言報告する。すると頭はどのような理由で喧嘩をしたか、何故、親に口答えをしたのか、何故、金を使わねばならなかったのかを聞く。頭はその聴取内容によって、罰を与えるかを吟味する。1回までの規則違反は注意処分、2、3回と違反が重なれば同僚や年輩をその場で依頼して詫言を入れさせる。その詫言の文句が決まっていた。

「頭(かした)んし、あたや英吉どんに代わって、断(ことわ)よ、言(ゆ)ごと頼まれもした。聞いてくいやい。こた、構(かね)もはんどかい？」すると頭が、

「ものの言うようじゃ、聞つも聞かんもあい。いけなこっちゃ、言(ゆ)うてみやい。」といわれたら、

「今度、英吉どんが言(ゆ)たい、したい、せらった事(こ)つが、ふさまし、悪(わ)いかった。ごあいもんどん、英吉どんも今から、こげな事(こ)た、しもせらいめで、頭(かした)んしの、立っちょい腹をなげて、堪(こら)えてくれやいこた、構(かね)もはんどかい？」すると頭は、話し合って今度は全員に向かつて、

「今、英吉どんに代わって佐市どんが断(ことわ)よ、言(ゆ)わったが、下(した)ん衆(し)はいけんや？」という。全員は声をそろえて、「したんごわす」と一言、そこで、頭は断りを聞くか聞かぬかを話し合う。

何遍も違反した者は親を呼んで断りを言わせることもあった。軽い罰は小遣い銭の減額、喧嘩等でいつも注意を受ける者に対しては御幣(しべ)立てという制裁を受けることがあった。

西村某(5年)という喧嘩大将がいて、他の部落から苦言がちょくちょくあり、先生からも注意を受けていた。この男に御幣(しべ)立ての制裁を与えることになった。そのことを伝えられても本人は平気だった。当時のえびすが丘は墓場で、新墓から火の玉が飛んだり、幽霊が墓の中でひそひそ話をしているのが聞こえるという薄気味悪い場所だったので、夜はあまり人も通らない。墓場の東側に八松(三本松)という老松があり、枯れかけていたが昼間は小鯛釣りの漁師の良い目標になるので切り倒されなかった。御幣(しべ)立てとはその松の根元に薪を立ててくることだった。

その日は12月11日の寒い夜だった。三日月の月明かりが墓場を照らし、墓影が揺らいでいるように見える夜であるが、本人は2本の薪を持って、悠々と出かけて行った。西村某が出かけた後、古頭、新頭たちは、白い布をつけて幽霊の格好をして、本人が帰って

くるところを驚かすために、途中の暗闇で待ち受けていた。そのため、帰る道は提示してある。ところが1時間経っても2時間経っても帰ってこないで、頭たちが待ち受けていることを知っていて、道を変えて帰ったのだらうと、西村某の家に行ってみたが帰っていない。頭や上級生たちが他の道を探したが見あたらず、深夜になって、今度は親たちが心配しだして、八松のところまで行ってみたら、松の根方に気を失って倒れているのを見つけ大騒ぎとなった。

その事情は、寒かったので紺の着物に羽織を着ていたが、薪を打ち込むとき、羽織の裾の上から打ち込んだことのように。立ち上がろうとしたら、羽織を何かが引っ張ったのではと思いながら、また立ち上がろうとしたら、また引っ張ったので、気丈夫な男と思えてもまだ子供、そのまま気を失ったらしい。それ以後、御幣(しべ)立ての制裁は禁止されたようだ。

1-17 肝付どんの枇杷

現在の北浜町の浦元水産の周辺に肝付どん(医院)の枇杷園があり、時期になると木の枝が折れるくらいに、沢山の大きな枇杷がなっていた。そこには番人がいて、なかなか枇杷園には近づけなかったが、行きずりに知らん振りをして1つ2つもぎ取って食べたが、とても美味しくその味にとりつかれていた。

ある晩のこと、私と親友で映画を観て、いつもの集合場所(北浜町)の家に行くと、他の友達連中は袋(米袋)を2つ持って、出て行ったとのこと、枇杷盗みに行ったことがわかった。我々も参加するつもりで番人に気づかれないように南側から入って行くと、畑の中央で、こそこそ動く人の気配がする。近づいて行くと西の方へすばやく移動した。我々も慌てた。てっきり番人が北側から入ってきたと思い、急いで西の方へ移動し畑を出る。枇杷園の西側は2メートル位の高さの石垣になり、その向こうは川縁になっている。彼等は石垣を飛び降りて、10メートル余りを川縁沿いに南へ逃げている。我々も恐くなって必死に走った。2人が枇杷の袋を担っていたが、一人はそれを投げ捨てて走り出した。

100メートルほど走ったが、我々の後ろからは誰も追って来ないことに気がついた。彼等が自分達を番人と勘違いしているらしく、オーイ、オーイと声をかけると、益々、足を速めた。新潟の下の方砂浜を通り、小屋(本浜町)の近くにきた時、自分達に気づいて砂浜の中に倒れるようにして座り、追いついた。彼等は一斉に一言「馬鹿が!」と言って、ふうふう息を切らしながら大笑い。1袋、落としてきた分も取りに行き、輪になって食べたが、また一段と美味しかった気がする。

第2章 串木野今昔（昭和・平成）

南竹 力

2-1 一本釣り帆船

昭和38年頃まで、串木野の五反田川の河口の砂州には、帆船が帆柱を列べていた。夜明け前に出帆した船は午後になると、帆に風をはらませて疾走して帰って来る。河口の入口で、すーと帆桁を下げて、その勢いで舵を操り、岸に正確に近づき、すばやくもやいをとっていた。船乗りは、ねじりはちまき、夏は上着に褌一つ、冬はどんざを着込んで腰巻き姿、赤銅色の顔が漁師としての誇りさえ感じさせる。船乗りの女房は、船が見える前から岸に立ち、桶を持って船が着岸すると、魚を選り分け、天秤棒で担いで近くの市場に運んで行く。天気の良い日の港（河口）での風景であった。



2-2 五反田川

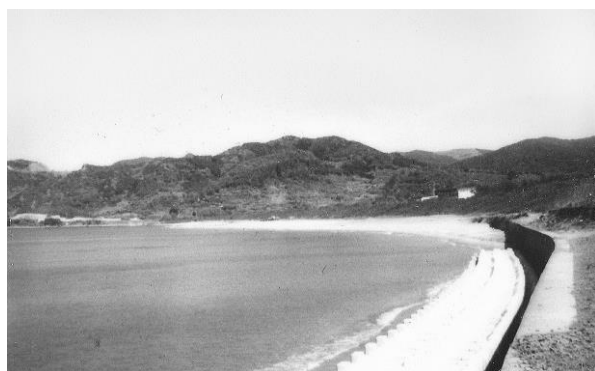
五反田川河口には、夕方になると漁を終えた漁師達は川岸で日没の間、お互いに釣果を語らい、明日の天気を気にしながら、西の空を眺めている。

五反田川は鰻や蟹が沢山生息していて、筆者もよく釣りに出かけた。釣り竿とバケツを持って、河口で川原の手頃な石を持ち上げ、餌の磯ゴカイ（ミミズ）を取る。釣った鰻は夕げの食卓に上がった。たまに大きな山太郎蟹（やまたろがね）が掛かってくる。河口の上流には石ころを積み上げたり、木の枝（柴）を沈めて、そこに集まる鰻や蟹を捕る仕掛けがあちこちに設けてあった。

河口の上流には大きな中州があり、野球をしたり、相撲をしたり、子供達の遊び場であった。中州の端にはシオマネキ（たうがね）が沢山いて、追かけるとあわて穴の巣に入り込む。たまに自分の巣を間違えて飛び出してくるのもある。それを追かけるのも楽しかった。満潮になる前に中州を出ないと膝上まで海水に濡れることになる。

対岸の野元の深田神社でガウングウン祭り（豊年祭り）が行われるときは、部落の間で一緒に出かけた。神社までは本浦からは平江橋と野元橋を大きく迂回して行かねばなら

ず、遠かったのが潮合いを見計らって、中州を通して、五反田川を横切った。ズボンをできるだけ捲り上げ、靴は手に持って川を横切るのであるが先輩格が先に川に入り足場を探る。その後、身長順に渡り始める。たまに深いところがあり、ずぶぬれになることがある。季節柄、寒かったことを記憶している。



野元海岸

2-3 浜ん馬場

「どけ行っとな」「馬場（ば）べ買物（けもん）に」、午後3時頃になると買物籠を持った主婦が浜ん馬場（はまんばば）に出かける。冷蔵庫などの無い頃、生鮮食料品を保存できないので、毎日使うだけの食材は買いに行く。また、主婦の社交場でもあり、いろんな情報の交換をする。

近郷近在の農家から朝採った農産物をリヤカーに積み込んで、午後

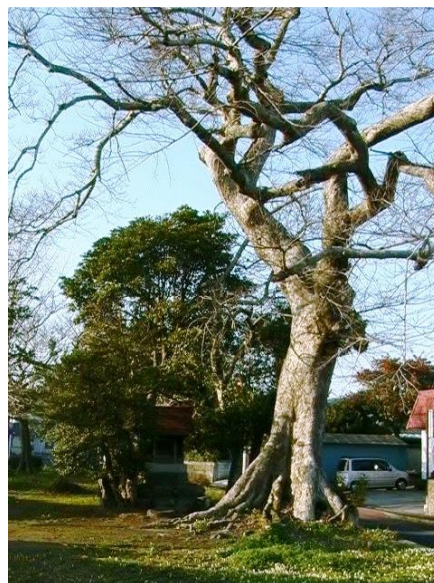
2時頃には浜ん馬場の通路の真ん中に列べられる。通路の真ん中なので、農産物はそれぞれどちら側かに向かってリヤカーを列べ、売る場所もそれぞれ暗黙で決められていた。筆者の叔母も生福（上名）の坂下から、毎日リヤカーを引いて来ていた。計り（ちきい）の上の野菜は泥も付いたままの新鮮なものだ。売り買いの駆け引きは目盛を見ながら、値引き交渉をする。午後5時過ぎにはそれぞれ店終いをして静かな浜ん馬場になる。



2-4 ロータリー

昭和40年代の頃までロータリーを中心に警察署、消防署、電報電話局、郵便局、商工会館、信用金庫が回りを囲んでいた。戦後の復興事業による都市計画が実施され、県内でもめずらしいロータリーを中心にした放射状の道路がつくられたようだ。駅前国道にもロータリーがあったように記憶している。

ロータリーは回りを少し、石を積んで、中には蘇鉄が生い茂る小さい森になっていた。ロータリーから春日町、大原、元町・浜ん馬場、串木野漁港、昭和通り（氏神んどんの森）へと道路が放射状につながる。木市、廿日市や夏祭りには、元町・浜ん馬場線は通行止めになり、1日中、賑わいを見せていた。昭和通方面へ行くと「氏神ん（うっがんどん）の森」があり、道路の車線をまたいで堂々とした大木が昔の面影を偲ばせる。



2-5 串木野駅

昭和30年代、就職列車を見送ったプラットホーム、プラットホームに続く地下道、近郊の村・町へ魚の行商でてんびん棒を担いだおばさん達でにぎわった待合い室、チッキで駅留め手荷物を受け付ける窓口、駅の売店（キヨスク）があり、老若男女で賑わっていた。



プラットホームの線路を挟んで東側はシラスの崖（台地）になっていた。防空壕の跡があり、学校帰りに探検した思い出がある。その後、造成され竹岸ハム（現プリマハム）が串木野に進出した。駅前には大きな広場があり、老舗「昭和旅館」の威風堂々とした玄関が駅前の象徴のように思い出される

駅の南側に駅員宿舎、そして踏切。筆者の通学路は大原の陸橋だったので、小中学校の登下校に汽車が通ると陸橋の真ん中で眺めるのが楽しみだった。

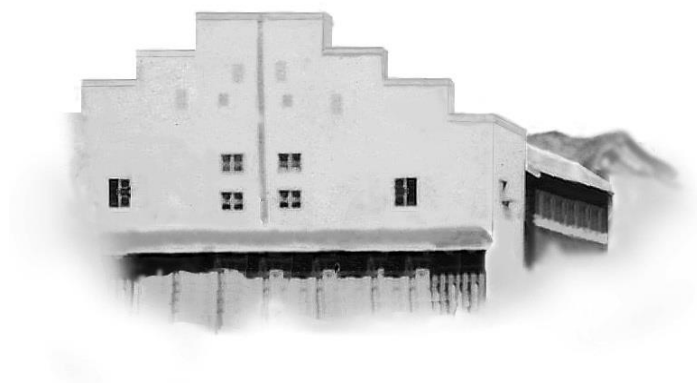
2-6 中央公民館

串木野で文化公演などあるときは、串木野市中央公民館が唯一の文化施設であった。映画館は元町に東映（昔は喜楽館と呼ばれていた）、春日町に銀界（後に移転）があった。

いろんな公演会や催しは地区の公民館も利用されていた。本浦公民館や島平公民館が100人程度は十分収容できる大きさだった。中央公民館は大原の交差点より現在の市役所前を通る道路と、元町から照島に至る道路の交差点にあり、跡地は現在は金物センターになっている。大原方面に向かっていくと流川（ながれご）に沿って、低いくぼ地が続いた。向かい側はブドウ園や畑地

（麦畑）で、繁華街の中心より少し離れていたが、小学校の学芸会やいろんな公演行事が行われた。また、串木野市の合唱コンクールなどは串木野高校の講堂も使用された。

中央公民館は木造の2階建て、舞台装置と楽屋裏備えた舞台を



持ったしゃれた造りで、2階見物席があり、文化の殿堂にふさわしい建物であった。既に老朽化が進み、2階席などへの入場は禁止されたように思う。その後、市民会館、市民文化センターがつくられ、中央公民館もその役目を終えて解体された。



昭和32年頃の串木野小学校学芸会

2-7 祇園祭（おぎおんさあ）

「アーナンチョウカイモ アーソーレ」太鼓の囃しに、2階建ての祇園山車の後をついていった幼い頃、たくさんの人で長いロープの付いた山車を引っ張り、その前には山車を先導する人、長い竹竿を持ち、山車が電線に引っかからないように、垂れ下がった電線を持ち上げる人。大きな店の前に来ると、山車の下から収納してある三畳程度の床を引き出し、床の下に脚を立てて、舞台となる。観客も大勢集まり、踊りの披露が行われる。踊りの艶やかさと華やかさが今でも脳裏に焼き付いている。踊りの演が終わると、店の主人よりの花（祝儀）を披露する。そして山車はまた駆け出して行く。串木野の街には「八坂山」など2、3台の山車がいたように思う。



2-8 漁師の編み物

数ヶ月ぶりに近海漁からの船が母港へ帰ってくる。子供たちは帰港時刻に合わせて、父や兄の帰りを待っている。接岸すると赤銅色の懐かしい顔が目浮かぶ。岸壁では各家に配る魚を切り分け、緑色のパーチ（耐水紙）に包む。漁師の土産は切り身や干しイカや塩辛などと、そして汗の匂いの染みついた洗濯物だった。

その中に子供たちへの手編みのセーターがあった。毛糸の玉を出港時に持っていった訳ではない。使い古しの綿ロープをほぐし、それを使って編み糸にする。使い古しの綿ロープを解したものは程良く毛羽立っていて、編み糸になる。漁師はもともと漁具の手入れで手先は器用である。漁労の合間に2本の手作り編み棒を持ち、防寒用のいろんな編み物を作っていた。

帰りを待ちわびる子供へセーターをつくるとき、前もって寸法を測ったわけではない。身体で感じている我が子の大きさを帰港したときの成長も考えながらつくるのである。筆者も父が作ったフィッシャーマンズセーターを兄から譲り受け、着込んで学校へ行ったものだ。どんなに乱暴にあつかっても破れることの無い、少し重いこのセーターを父が洋上で編んでいる姿を思い浮かべる。



2-9 漁師の気象予報



筆者の家は、南側に漁港、西側に防波堤があるところに位置していた。小学校に通う頃、父は西の空やときには海鳴りの音を聞きながら、今日は雨が降るから傘を持っていけと言われ、本当に予想通りだったことを覚えている。ラジオの気象予報よりも正確であった。

漁師は、長年の操業経験や先代から伝承により、さまざまな気象を熟知していた。朝焼け、夕焼け、雲の形、気温、湿度、風の強さ、潮風の匂い、海岸の地形による海鳴りなどを、六感を使って判断をしていた。

漁師は、午前3時頃から床より起き出て、何時も決まった場所（川口）に集まり、海鳴りを聞いたり、古老の予報を聞いてから出漁する。漁を終えて、船の舳をとると、朝と同じ場所に集まり、釣果や明日の天気をお互いに予報する。

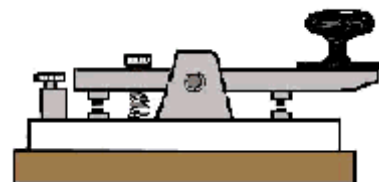
2-10 親子ラジオと漁労情報



昭和40年代まで、どこの家庭も親子ラジオが設置されていた。各地区のラジオ受信所で受信、増幅して、各家庭まで配線、音量調整付きスピーカボックスが取り付けられる。（受信所からの配線は1線を空中配線し、一方の線はアース接地されていた。）ラジオ番組は受信所が選択して送っていた。

小さい頃、「赤銅鈴之助」「まぼろし探偵」など聴いた覚えがある。母は「君の名は」に涙を流していた。本浦地区では毎日、午後6時か7時頃だったと思うが、親子ラジオに漁労情報が流される。串木野漁業無線局に漁労中の各船舶から打電された電報を毎日受け取り、受信所から放送するのである。この時間だけは漁労に従事している家庭は一斉にスピーカに聞き入る。

「第六・・・丸、北緯・・・分、東経・・・分、・・・回目操業中」の後に「昨夜、皆無」「天気良好なれど漁なし」「黒〔鮪〕・・・本」「カシキ（炊ぎ・かしぎ）も元気」等と続く。漁船の肉親の安否と漁獲を確かめ、他船の漁獲情報のメモをとる。この電文は、各船とも漁獲を正確に送らない、この語句を使ったら、どの程度の漁獲量だと各船で決めていたようである。数十トンのマグロ魚船からどんな時化の中でも毎日、若い通信士は故郷へ電鍵（キー）を叩いた。



2-11 恵比須神社の六月灯（ろっがっど）

学校から帰ってくると棚の奥にしまっていた提灯を取り出し、今年はどうな絵を描いてもらえるか、心待ちにしながら、タワシで水洗いして、半紙をきれいに落とし乾かす。父に提灯に奉納、奉寄進と名前、武者絵や漫画の主人公の絵を書いてもらい、それを糊で貼り付ける。兄弟それぞれ絵柄は違っていた。



夕食後、浴衣に着替え、自慢の提灯の絵を早く神社に飾りたくて、明るいうちから出かけていたことを憶えている。筆者の家が恵比須神社の近くだったので、薄暗くなってくるころ、ローソクを灯しに行き、家族で恵比須神社の参拝をする。それぞれの家族は出漁している夫や息子の健康と航海の安全、大漁をローソクの光の中で祈っている。

子供たちは近所の友達と提灯を眺めながら誰の武者絵はかっこいいとか、どの漫画の主人公だったとか、ミニ観賞会が始まる。女の子の提灯は「なかよし」や「りぼん」などの漫画の絵が多かった。だんだん暗くなると、夜店の明かりが華やかになる。もらった少しの小遣いをもって夜店を回って歩くのも楽しみだった。

六月灯から帰ってくると、縁先の物干に提灯をつけ、井戸水で冷やした西瓜を家族で割って食べるのが毎年の恒例だったように思う。



2-12 ルース台風

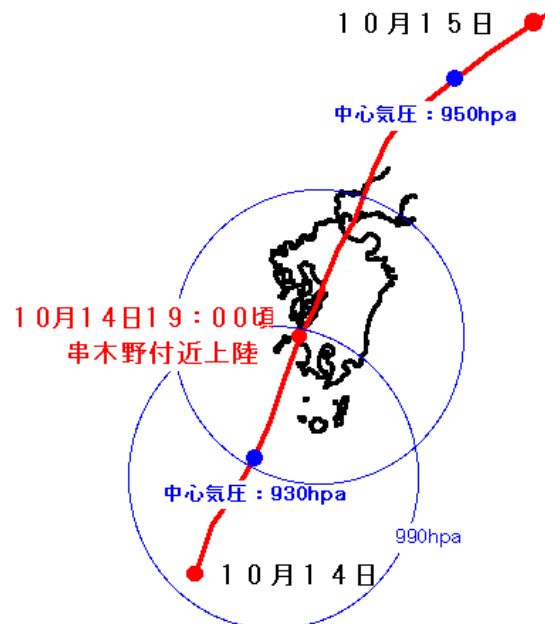
ルース台風は、昭和26年10月14日19時頃、鹿児島県串木野市付近に上陸した。串木野では海岸一帯を高潮が襲い、甚大な被害を出した。

筆者は当時4歳、西浜町（本浦西）に住んでいた。父が夕方からの高潮に気づき、父は私を背負い、母は弟を背負って、兄と姉を小脇に抱え、高潮で膝上まで増水した道路を新潟（しながた／北浜町）へと避難した。父母の話で、父が風雨が収まってから、海水をかき分けながら家にたどり着いたときは、家は跡形も無くなっていたらしい。

数日後、祖父に連れられて家に帰ったときは油まみれの壊れた家の材木を集めて、大工だった叔父たちが建て直していたことを思い出す。鮮烈な記憶のなかにある情景は、一部は後年に聞かされて、そのように感じているのかもしれない。台風が来る前までは串木野漁港は鰯の豊漁で活気があり、父も小型船で漁に従事していた。台風によって船は大破し、家は壊れ、全財産を失った。それからの父母の苦労は計り知れないものだっただろう。

<ルース台風>

昭和26年10月9日にグアム島の西海上で発生し、発達しながら西北西に進み、12日午後には進路を北から北北東に変えた。13日夜に宮古島と沖縄本島の間を通過して東シナ海に入り、14日19時頃鹿児島県串木野市付近に上陸した。台風は速い速度で九州を縦断、山口県・島根県を経て日本海に出て、北陸・東北地方を通過して15日夕方には三陸沖に進んだ。



2-13 水揚場

願船寺から漁港へ坂道を下ると魚の匂いがするという。いつも生活している者にはあまり感じない。

昭和35年頃、水揚場のすぐ近くで育った筆者にとって水揚場は自分の遊び場だった。周辺にはカジキ・マグロ用の大型トロ箱やアジ・サバを入れる小さなトロ箱が山高く積んである。箱を積み崩して近所の悪戯坊（われこっぼ）と基地をつくり、箱屋の女将によく怒られた。

水揚場はいろんな行事に使われ、港祭りの舞台や映画上映、のど自慢などが行われたことを思い出す。木造の東西に長い切り妻屋根を2つ組み合わせた構造の水揚場はルース台風の高潮にも耐え、長い間、港の出入港を見送ってきた。

39トンクラスのマグロ船が数ヶ月の航海を終え、水揚場にはカジキ（マゲ）やマグロが並んでいる。フカの強烈な内臓の匂いが鼻を突く。カジキはくちばし（嘴）を切り、カジキやマグロは大きなトロ箱に氷を入れて仲買のトラックで市場へと運んで行く。カジキの嘴は漁師がロープの手入れをするスパイキとしてよく使われていた。

甬島から大敷（網）の船が入ると母は魚の選り分けの仕事をしていた。船倉から選別台に取り上げられた魚を流れ作業で選別してゆき、次々と箱に詰められて氷を入れて運ばれてゆく。仕事は深夜におよび選別台を照らす投光器の明るさとエンジンの響きが寝床まで届いた。



昭和42年頃の串木野漁協魚市場（水揚場）

2-14 本浦公民館

西浜町と港町の間、浜町郵便局の隣りに本浦地区を代表する公民館があった。公民館は西側と北側に入口があり、100～150人程度は収容できた。

南側に舞台があり、地区の祭り行事や映画、旅回り劇団の公演などが行われていたことを思い出す。地区検診や選挙などの投票所、地区全体の会合などに使われていた。

本浦青年団の集会所にもなっており、防火、防災など活動やいろんな行事を支えていた。年1回の漁願相撲大会のときは、建物南側に安置されていた御輿を引き出して、恵比須神社よりご神体を神輿（みこし）に遷す儀式を行って相撲会場へ二才衆が担いで行った。

各部落の子供会などは本浦公民館と漁業協同組合の講堂を使って行われたように思う。公民館は本浦での文化施設として使われていたが、老朽化が進み、その後、串木野漁協漁民研修センターとして新しく建て替えられた。

<本浦公民館のサイレン>

夜の静けさの中に、突然、消防署のサイレンの音が聞こえる。少し経つと本浦公民館のサイレンの大きな音が聞こえ、目が覚め急に恐怖心に襲われる。父が家の外に飛び出し、周囲の空を見に行く。サイレンの音の間隔が風に流れ、強弱が怖さを駆り立て、布団の中で震えて聞いている。しばらくして父が帰ってきて、家の近くの火事ではないので心配しないで寝なさいと言う。落ち着くまで、しばらくは寝つかれない。

早朝、眠い目をこすりながら起きると父に夕べの火事の状態を聞く。本浦地区は木造の家屋が隣接しているため火事があれば延焼を免れない。そのため火の用心は家庭で徹底して行われていた。本浦地区での大きな火事は起こっていない。これは、部落公民館や本浦青年団、本浦消防分団の防火・防災の活動があり、毎夜の見回りなどの功績に寄るところが大きい。今でも当時のサイレンの音が耳に残っている。

2-15 市（いち）の賑わい

串木野では、1年に2、3回、市が行われていたように思う。廿日市(12月)、初市、人形市、木市と呼ばれていた。元町から栄町にかけて、現在のサノサアーケードの交差点を中心に東西南北に歩行者天国となった。市のカラフルな出店の並びや賑やかさは、子供の頃はわくわくする行事の一つだった。

この日は親から小遣いを10円程度もらって、姉弟と市の雑踏の中に駆け込んでゆく。お金はポケットに入れない。いつもより多い小遣いはしっかり手に持って出かける。まず、市の端から端まで出店の売り物を眺めたり、大道芸人風の売り子の話に耳を傾けたり、ゆっくり買物の品定めをする。買うときは多くて5円、それから3円、2円程度のものを買う。手のひらの10円は、しっとりと汗ばんでいるが、自分にとっては、貴重な大金であり、お金の使い方を勉強する機会でもあった。いろんなものを買ってから、いつも後で買わなきゃ良かったと後悔していたことを思い出す。貧しい時代ではあったが、楽しかった情景が自分の脳裏に焼き付いている。

<市（いち）の余話>

小学校のとき、市の出店を眺めて回っているときに、ある出店の主人より、店番か使いを頼まれたことがあった。どのようなことを頼まれたか今は記憶にない。そのお礼といって店の品のおもちゃをもらった。もちろん、自分の小遣いで買えるような品ではない。

我が家に帰ってから、私がおもちゃを持っていることを見た母は、少し怒り気味でそれはどうしたかと訊ねるので、手伝いをしたのでもらったというと、その店に連れて行けと母が言う。私は一緒行こうというと、母はもう良いと言ってその後は訊ねなかった。自分の子供を信用しながらも小遣いで買えないものを持って帰ったので、確かめたかったのだろう。貧しい頃の凜とした母の姿を思い浮かべる。

2-16 小学校の運動会

運動会は10月末から11月3日(文化の日)の間に行われていた。朝晩が冷たく感じられる時期であった。運動会までの1週間位は行進の練習やマスゲーム、応援の練習などがあったように思う。私は背が低いので、行進のときは一番後ろであり、前の人と歩幅を合わせるのが大変だった。



父母は運動会前日は、つけ揚げや昆布巻きをつくるのに大わらわである。学校から帰るとお重に詰まれた料理を風呂敷に包んで、親類や近所に持って回る。お礼にみかんや柿などをもらって帰る。

当日は朝早く起こされて朝食後、運動着姿で冷たい外へ飛び出す。家を出るとき莫蔭を持たされ、運動場の陸上トラックの見えるところに家族の観覧場所を確保しておく。観覧場所は各部落ごとに決められていた。

徒競走ではいつも緊張し、足がすくみ、いつも遅かった。1番、2番はノートが賞品で、参加賞は鉛筆1本だったように思う。一番楽しかったのは昼休みの時間で、親もお重を抱えて待っている。いつも麦飯だが、運動会は白いおにぎり、一番好きだったのはシイラの干し魚の角煮だった。午後からはクラス対抗リレーやマスゲームがあり、最大のイベントの部落対抗リレーがプログラムの最後であった。

部落で選ばれた各年の代表は、それぞれの部落の色の鉢巻きをする。照島小学校では、運動会が部落ごとに分かれていたと聞く。串木野小学校では部落対抗リレー以外は紅白対抗であった。部落対抗リレーが始まると部落の父兄はトラックにはみ出さんばかりに大きな声援を送る。私の部落は本浦西(西浜町)でよく優勝していた。ただ、足の遅い私は意気揚々と帰って行く部落代表選手をうらやましく思いながら帰ったことが懐かしく感じられる。



串木野小学校の運動場の銀杏と東側に梅檀(せんだん)の木が昔の面影を残している。

2-17 銭湯（風呂屋）

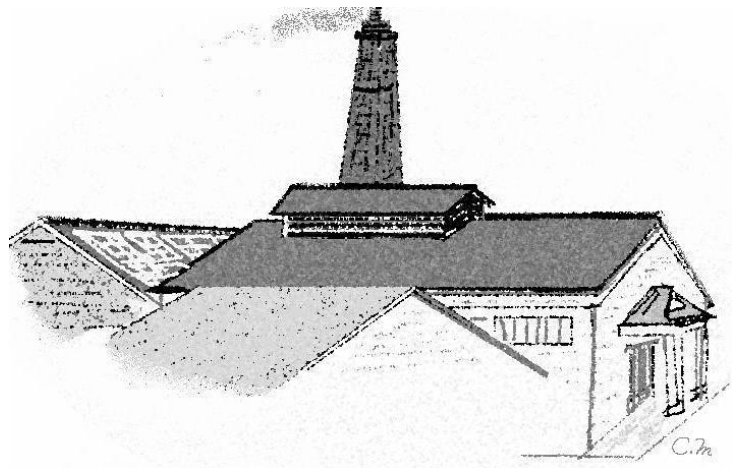
本浦地区には4軒の銭湯（風呂屋）があり、小瀬湯は小瀬墓地の南側に位置し、皮膚病などに効能がある湯だった。今でも元湯として営業している。浦和町の銭湯は御倉山（おくらんやま）と鉄工所の間、漁業無線局の下にあった。

港町の港風呂（みなとぶろ）は海浜俱樂部（旅館）の北側、理髪店近くに位置し、海岸から煉瓦作りの高い煙突が見えていた。時々、港風呂に兄弟でお湯に浸かった思い出がある。入口の左側が男湯で番台、脱衣室、浴槽は2つあり熱い湯とぬるい湯があったように思う。

当時は、家に風呂が無い家も多くあり、それぞれ近くの銭湯に通っていた。五右衛門風呂の代わりに庭にドラム缶で風呂をつくり戸板で目隠しにしていた家もあった。

小屋（本浜町）には、浜ん馬場から坂口の坂を西に下ったところに銭湯（よたぶろ）があった。

島平地区には、小瀬湯を含めて5軒あり、小瀬湯の近くに中湯（なかゆ）、長命湯（ちょんゆ）があり、無量寺近く（西島平町）に福田湯（ふっだんゆ）、田中中村（東島平町）に茶碗屋湯（ちゃわんやゆ）があったと聞いている。元町には鶴之湯（つるのゆ）、春日町の病院の斜め向かいの銭湯、曙町の駅下、バス停留所の裏に銭湯があった。それぞれ風呂の呼び名があり、「てつゆ」、「げんさんゆ」「たけのゆ」などと呼んでいた。



2-18 ガルどんのダゴ投げ

梅雨の終わり、蒸し暑い頃、本浦地区では「ガルどんのダゴ投げ」の風習があった。ガルどんとは河童のことである。「ガルどん」とか「ガールどん」と言っていた。夏休みに入って、子供達が水難に遭わないように、河童に好物のダゴ（団子）を供えるのである。ダゴを投げるときの言い回しがあり、

「ガルどん、ガルどん、泳つとき、足しよ索引つきゃんな」、「ガルどん、ガルどん、泳つとき、ジゴを引っ抜つきゃんな」といって、だご（団子）を投げた。

我が家は港の近くだったので、カンナの葉っぱに包み、紐でくくって、兄弟それぞれ、港の岸壁から海へ投げていた。

今でも、市口（いちき串木野市北浜町から京町、汐見町を含む地域）では、毎年、旧暦の5月16日の水神様をまつる日に、五反田川河口でダゴ（団子）をワラット（ワラ包み）にして、ガルどんにお供えしている。

2-19 肥後守

「肥後守」といっても、今の若者は何のことか判らないだろう。折り畳みのナイフである。小学校の高学年以上はほとんどポケットに入れていた。学校では鉛筆を削り、お互いに削り方の上手下手を競ったものだ。山に行っては竹で豆鉄砲を作ったり、パチンコ用の木の股を切ったりして遊んだ。

よく手の指を切ったが今のようなカットバンみたいなものはなく、よもぎの葉をもんで傷口に付けたり、新聞紙やちり紙をまいたりして血止めをするくらいだった。切れなくなるとその辺の手頃な石で研いだことを思い出す。このナイフは決して護身用などではなく道具としての必需品であった。

小学校高学年になって初めて使う自分だけの工具であったのではないだろうか。また、ナイフの使い方によっては怪我をすることも身を持って体験した。

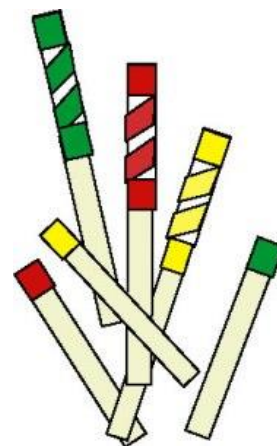


2-20 陣取り「カイグンユウギ」

陣取り（陣取り）は、近所の遊び仲間と電柱（でんきんばした）を陣にして、遊んだ。

遊び場は道路であり、空き地だったりした。本浦地区には「カイグンユウギ」という陣取りの遊びがあった。海軍に由来する遊びなのか定かではない。

普通の陣取りはお互いを鬼ごっこ形式で追いかけて、敵の体をタッチする。ジャンケンをし、勝ったら陣地に連れて帰ることができる。あるいは、どちらが自陣を先に出たかの時間差で、優越が決まり、優先の者が敵の体にタッチしたら、陣地に連れて帰ることができるなどのルールがあった。



「カイグンユウギ」では、10cm 程度の長さの竹の先端にテープで赤、緑(青)、黄のテープを巻いたものを各5個程度、15cm 程度の竹の先端から5cm 幅にそれぞれ赤、緑(青)、黄を巻きつけたものをそれぞれ1個ずつ、それぞれ赤大将、緑(青)大将、黄大将と呼ばれていた。その他に、大将クラスの竹で高射砲というのもあった。ルールは、陣を出るときに必ず1個だけ竹を手を持ち、お互いに身体にタッチしたときに、竹を見せ合い、勝ち負けを決め、負けた方の竹を持ち帰る。あるいは、最初から竹の色が分かるようにして、相手を追っかけてタッチするルールもあり、ゲームの初めに申し合わせをしていたように思う。

以下のルールで、勝ち負けを決めていた。

1. 赤は緑(青)に勝つ、緑(青)は黄に勝つ、黄は赤にそれぞれ勝つ。
2. 大将同士は1. のルールに従う。大将は相手の同じ色に負ける。
つまり、赤大将は赤に負ける。
3. 相手の陣にタッチできるのは赤だけで、タッチしたら、相手の赤、緑(青)、黄の3本を持って帰ることができる。
4. 普通の陣取りと同じで、自陣にタッチしている者が一番強い。

大将を取られると、不利になるので、余り持ち出さなかったが、大将と大将を守る色を持つものがペアになり、相手の陣を攻める。たまに、2本の色の竹を隠し持っていて、見せるときに勝つ色を出すルール違反もいた。

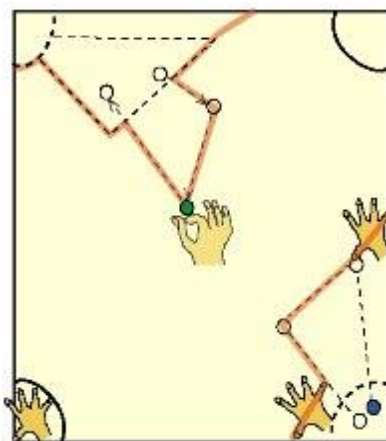
＜おはじきによる陣取＞

雨の日や仲間が集まらないときは「おはじき」で陣取りをしていた。このゲームは女の子達がよく遊んでいたが、ときどき仲間入りしたことを思い出す。

筆者は水揚げ場の近くに家があり、雨の日は水揚げ場がよい遊び場だった。

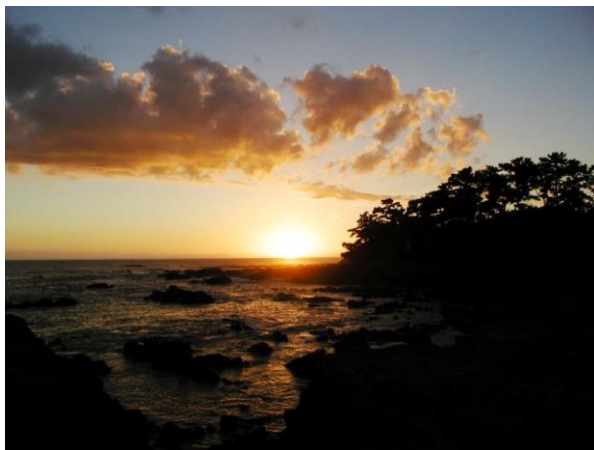
水揚げ場で遊ぶときは、コンクリートの上に薪炭か焼き瓦のかけらで線引きをした。

1. 1 m四方の枠を書き、4隅の角に親指を置き、片手で親指を中心に回転させて、 $1/4$ の円の陣をつくる。そして、ジャンケンの順で、それぞれの陣地からスタートする。
2. 自分の陣地から、「おはじき」を弾いて、マークしておき、3回弾いて、自分の陣地に入れば、弾いた枠内は自分の陣地とする。その時、四角い枠と自分の陣地との空間が片手と広げてとどけば、自分の陣地とする。四角い枠だけでなく、相手の陣地と自分の陣地の空間も同じように片手を広げてとどけば、自分の陣地とする。



第3章 串木野さのさ

ハア～ 百万の 敵に卑怯はとらねども 串木野港の別れには
思わず知らず胸せまり 男涙をついほろり サノサ



長崎鼻の落暉 (2003. 09)

3-1 串木野さのさの由来

南竹 纓二

3-1-1 カジキ、マグロの延縄漁

明治16年、島平の坂口仲左衛門は秋太郎（バシヨウカジキ）を延縄で漁獲する方法を考案した。本浦の上竹庄兵衛と前瀧長之助の2人の船主はこの漁法を採用すべく坂口さんの指導を受け延縄を作った。延縄30尋（ひろ：両手を左右に広げたときの両指端間の長さ、1尋（約1.8m）ごとに12尋の枝縄をつけその端に釣針をつける方法である。

試験操業のつもりで2隻が串木野港を夜明けに出港し長崎県対州沖に向かった。帆走と八丁櫓（ろ）で2日目に漁場に着いた。その夜、鯖（さば）釣りをして翌日その鯖を餌にして投縄したところ思わぬ漁獲を得た。延縄漁は大成功だった。



当時の帆船は氷も多く積めないので魚の保存が利かないし、積載能力もない。わずか3日で満船となり、五島玉之浦港に入港、水揚げした。試験操業の2隻の成果は早速故郷に知らされた。結果待ちしていた本浦の帆船20隻余りは延縄を積んで一斉に串木野港を出て漁場に急行した。

各船はそれぞれ大漁して玉之浦港に入港したが、玉之浦にはこんなに大物を扱う問屋が二、三軒しかなかった。水揚げした魚は海岸の道路に並べられたが、仲買人も少なく販売能力もないので、次の航海には半分の船は富江港に入港することになった。長崎より鮮魚運搬船も回航され、仲買人も出張していて値段も安定した。玉之浦、富江の両港は串木野船ブームでわき、町も賑やかになった。

明治22年、延縄の餌に鯖の生き餌が使われるようになり、漁獲高も増加した。そのころの帆船の労苦は並大抵のものではなかった。早朝、櫓を漕いで玉之浦、富江港を出て、対馬近海の漁場に夕方着き、鯖釣りで夜を明かした。翌日は延縄作業、午後2時ごろになると交代で櫓を漕ぎ、船を進め揚縄作業をした。揚縄作業を終えると餌釣りをする。これの繰返しだった。時化模様になると早めに、玉之浦やその付近に避難した。

3-1-2 鯖(さば) 釣り

船首を風上に立てるために潮帆（シーアンカー）を流して漂流、両舷に瓦斯灯3個ずつで海面を照らし、船員は両舷の船べりに分かれて座り、一本釣の糸を垂れて鯖が食うのを待つ。ぼんやりと灯った瓦斯灯に照らされながら船べりに座っていると昼の疲れで眠気がくる。

うつらうつらとして思い出すのは遠い故郷の家族のことや、愛しい彼女の夢を見る。眠気覚ましには歌を唄う以外になかった。隣の人のが子守歌になって眠気は加わるばかり、そこで両舷の対面同士が掛け歌をすることになり、負けたら入港してから、ケット巻き(菓子)を買うことになっていた。どんな歌でも歌詞をたくさん知っていた方が勝だった。

3-1-3 五島さのさ

一番楽しかったのは漁を終えて玉之浦、富江に入港して水揚げした晩、乗組員を労うために町に繰出し全員で軽い宴会をすることだった。そのとき芸者衆が唄って聴かしてくれたのが「五島さのさ」だった。この歌が鯖釣りときの掛け歌によく唄われ、自作の「さのさ」もよく出るようになった。漁閑期になって故郷へ帰ると、若い船員達は浜辺に集まり親友同士でグループになって、掛け歌をして夜半を過ごし、「五島さのさ」が流行のようになって唄われた。

五島さのさは福江島、中通島によって唄い方が少し違う。
串木野漁船が基地としていた福江島の五島さのさのが串木野さのさへ唄い継がれていると思われる。

五島さのさ(長崎県民謡)の代表的な歌詞を紹介する。

牛を買うなら(ネ)
牛を買うなら五島において(ハア ヨーイヨイ)
島といえども昔の原よ(ハア ヨイシヨ)
子牛(べこ)はほんのり赤おびて
四つ足丈夫(足腰丈夫)で 使い良い(サノサ)

長崎を ちょいと船出しゃ 五島の鯛の浦 奈良尾の浜をば 横に見て
佐尾鼻 樺島 屋根尾島 福江の港に着くわいな

情けなや これが浮世か 知らねども 同じ世界に 住みながら
一つの月星や 西東 わかれて 暮らすも 今しばし

雨風に 明けるその日の 身の切なさよ もう止めましたよ 船乗りを
とというものの 港入り 三筋の 声聞きゃ 止められぬ

唄うなら 何が良いかと 問うたなら 磯節 二上り 三下り
米山甚句も 良いけれど五島 じまんの さのさ節

3-1-4 串木野さのさ

当時は気象情報を把握するのに晴雨計（気圧計）と永年の感だけが頼りなので、帆船は急激な変化に対応できず五島灘で遭難する船も多かった。このような操業のなか、覚悟を秘めながら串木野港を出るとき思わず知らず涙した者もあったと思う。沖へ出ても故郷を忍ぶ切なさが歌詞となって唄われた。こうして賑やかな「五島さのさ」が哀調を帯びた「串木野さのさ」に変わっていった。

大正6年頃、八丁櫓の帆船が補助エンジンを据え付つけて機帆船となり、動力化によって船体も大きくなり積載・保存能力も増大した。操業数が多くなり、漁獲量も増えてきたので五島の両港を基地にしていた漁船は長崎港に水揚げし、串木野港に帰港するようになった。

この頃から「五島さのさ」の調子は自然に影をひそめ、独特の「串木野さのさ」として唄い継がれてきた。



いさり火の塔：海難殉職者の碑、港が見える恵比須ヶ丘に建立されている。

3-2 民謡「串木野さのさ」

明治の頃から串木野の漁師達は十トン余りの帆船で長崎県五島、玉之浦、富江港を基地としてさば釣りやカジキ、マグロの延縄漁に男女群島近海を操業していた。これらの港の料理屋で唄われていた「五島さのさ」を、郷里を偲ぶ哀調に変えて唄ったものが「串木野さのさ」となった。

近年、竹原喬之助氏が海に生きる男の船出の哀愁と留守を守る家族の慕情を込めて荘重に振り付けしたのが踊りの始まりだった。

串木野さのさは掛歌として唄い継がれ、120余りの歌詞がある。その中から代表的な歌詞を紹介する。

(ハア～)

百万の (ハア ヨイショ)

敵に卑怯はとらねども (ハア ヨイショ ヨイショ)

串木野港の別れには 思わず知らず胸せまり

男涙をついほろり (サノサ)

もう泣くな 出船の時に泣かれては 船を見送るそなたより
港出て行くこの僕は まだまだ辛いことばかり

今出船 汽笛鳴らして旗振り交わし しばしの別れを惜しみつつ
船は出て行く海原へ ご無事で大漁祈ります

波静か 月さえわたる南の沖で いとし我が家の夢を見る
無事か達者か今頃は どうして暮らしているのやら

こんどまた 大漁してくれ大漁する 誓って港を出て三月
明日は満漁の帰り船 妻子の笑顔が目に浮かぶ

串木野の港よいとこ 一度はおいで 汐路に伸びゆく幾千里
----「沖でかもめに 漁場をきいてよ」(追分)----
幾日ぶりかで大漁旗 かじきまぐろの山をなす

落ちぶれて 袖に涙のかかるとき 人の心の奥ぞ知る
朝日を拝む人あれど 夕日を拝む人はない

義理も捨て 人情も捨てて世も捨てて 親兄弟も捨てたのに
捨てられないのが主一人 もとは他人でありながら

いつまでも あると思うな親と金 ないと思うな災難を
九月一日震災に さすがの東京も灰となる

明日ありと 思う心の仇桜 夜半に嵐の吹くように
荒海稼業の我々の 明日の命を誰が知る

夢去りて 人に踏まれし道草の 露の情けにまた生きる
たどる苦難の人生も 涙でくらす五十年

砂白く月清らかな海岸で 好いた同士の語り合い
これが理想の妻なるか やぶれてはかない失恋か

我が恋は 玄界灘よりまだまだ深い いつもあなたにあおあおと
岸うつ波の身のつらさ 岸に碎ける主の胸

夕空の 月星ながめてほろりと涙 あの星あたりが主の船
とびたつほどに思えども 海をへだててまなならぬ

やるせなや 泣いて泣かせてかたせ波 串木野乙女の純情を
沖のかもめにことづけて 主さんのもとへ届けたい

雨は降り 波はデッキを打ち洗い 寒さに手足は凍えたと
いってよこしたこの手紙 肌で温めているわいな

身はここに 心はあなたの膝元へ たとえ幾月はなれても
松のみどりは変われども 私の心は変わりやせぬ

近ければ 顔見て笑う節もある 遠けりや空見て泣くばかり
落ちる涙を溜め置いて 主へ文書くすずり水

から傘の 骨はばらばら紙破れても はなればなれになるものか
私とあなたは千鳥がけ ちぎれまいぞえ末永く

主となら 裸でもよい添われるならば 竹の柱に茅の屋根
寝ながら月星拝むとも 三度の食事は一度でも

十五夜の 月はまんまるさゆれども 私の心は真のやみ
せめて今宵のおとづれを 一声聞かせてほととぎす

ひよっとすりゃ これが別れとなるかも知れぬ 暑さ寒さに気をつけて
短気おこさず深酒を 飲むなと言うたがわしゃ嬉し

うぐいすは 梅の小枝で一夜の宿を 枝を枕にすやすやと
恋の夢見て目を覚まし 空を仰いでホーホケキョ

月づくし 吉野の山の春の月 四条河原の夏の月
三保の松原秋の月 田子の浦田の冬の月

歌なれば東雲(しのめ)節か二上りか 米山甚句もよけれども
今時はやりの磯節か いつも変わらぬさのさ節



第4章 [漁願（ぎょがん）相撲]



昭和35年、漁願相撲に帰港したマグロ船

4-1 漁願相撲

毎年、7月になると出漁していた串木野のマグロ船は全船帰港する。串木野漁港がマグロ船でひしめき合う。恵比須神社に大漁を祈願するための奉納相撲が行われるためである。

相撲大会前日、船乗りの家庭では、明日のお重に詰めるごちそうを料理するのに大わらわである。出来上がったお重は近所にも配ってまわる。

当日は、港内の漁船は一斉に大漁旗を掲げ、相撲大会を盛り上げる。奉公に出ていた20歳の娘達は、奉公先に暇をもらい、相撲大会の接待役として花を添える。これは、若い船乗りとの集団お見合の場ともなり、多くのロマンスが生まれた。



昭和 43 以降、船員の減少、マグロ船が大型化による操業日数の増加、マグロの漁場が遠洋になったことによる経費節減で漁願（ぎょがん）相撲も行われなくなった。

二才衆は、恵比須神社よりご神体を神輿（みこし）に遷す儀式を行ない、それを担いで、相撲会場に鎮座し、奉納相撲がはじまる。競技の前にそれぞれの船の大漁旗を化粧回しにして、土俵入りして甚句の披露をする。漁願（ぎょがん）相撲の前日まで、波止場では甚句を唄いながら、踊りの所作を稽古する風景が見られた。写真は昭和 35 年頃の漁願（ぎょがん）相撲の一コマである。



4-2 相撲甚句

<前唄>

揃う 揃うた 揃いました
あ〜あ 関取衆が揃うた
秋の出穂より まだ良く揃うた

はあ〜あ 船乗りさんには どこ見て惚れた
踊る甚句のよ 意気の良さ

はあ〜あ 串木野港に
舟が百杯（ばい）着きゃ
帆柱も百本（ぽんぽん）
止まる鳥も同じ百羽（ばっば）
雀がチュ 鳥がカア 鳶がほだね吹きや
チンする する

<出船甚句>

眺めも清き恵比須が丘でよ 晴れの相撲を終えるなら
しばしの名残り別れをば 惜しみながらも船の上
見送る涙知らぬげに 笑顔で握る錨綱
五色のテープは風まかせ 別れの汽笛が身に沁みる
串木野港(みなと)を後にして汐路遥かな三陸へ(インド洋)
白波けたてて幾千里 波を枕の夢かなし
鷗飛び交うその中を 昨日は東今日は西
逆巻く怒涛波しぶき この身は寒さに凍るとも
負けずに我ら元気にて 紅葉色づくその頃は
大漁旗立て帰ります どうぞ皆さん留守中は
ご無事安泰いや栄え 今日の土俵で祈ります
今日の土俵で祈ります



土俵入り(昭和42年)

<入船甚句>

夕焼け色どる南の沖はよ 満船大漁の旗立てて
船足深く来る船は あれは串木野まぐろ船
長の航海さぞやつれ 逢いたい見たいは皆同じ
電波は飛ぶ飛ぶふるさとへ
波路（汐路）遥かに種子屋久か 浮き立つ島は数々の
煙たなびく硫黄ヶ島 風手にのぼれば日向灘
朝日に輝く桜島 北にそびゆる高千穂や
南遥かに眺むれば 姿うるわし薩摩富士
岬の灯台後にして 船路は急ぐ薩摩潟
火立ヶ丘の山々も 近くなるのか海鳥は
群くみながら飛んで行く
ああ懐かしや串木野港 三月の旅路もつれづれに
無事に帰った嬉しさに 迎えるあの娘は
笑福えびす顔 明日の大漁夢見つつ
思いは同じおしどりの 愛と情との錨綱
愛と情との錨綱

<民謡甚句>

お国自慢を甚句に詠めばよ 北は北海盆踊り
津軽恋しやあいや節 八戸小唄で夜が明ける
今も昔も変わりなく 草木もなびく佐渡おけさ
どじょうすくい安来節 手拍子そろえて木曾え節
ヨサコイ節にはトンコ節 三井三池の炭坑節
東京音頭や舞妓はん 花笠音頭にゃ花が咲く
伊勢は津でもつ伊勢音頭 南国土佐の阿波踊り
博多祇園か黒田節
五島さのさのなつかしや ばってん熊本おてもやん
日向かばちのよか嫁じょ ひえつき節には鈴が鳴る
三味や太鼓にはやされて じゃんじゃん踊るは鹿児島
がっついよかよかはんや節
お国自慢のその中で 港串木野本浦の
相撲甚句は日本一 踊れ大漁の旗の波
踊れ大漁の旗の波

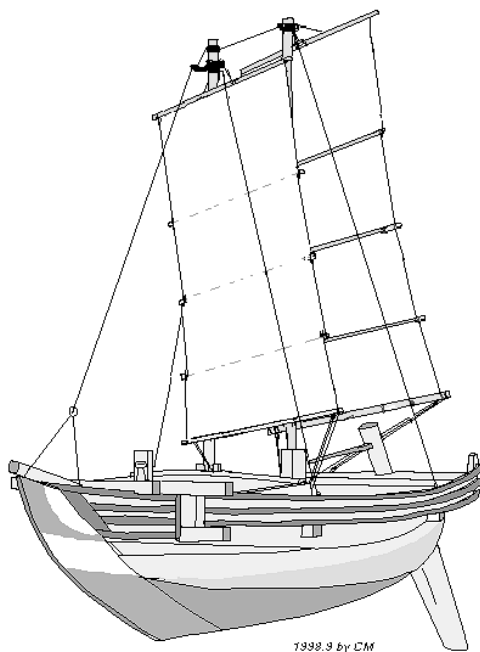
<嫁入甚句>

今日の良き日を甚句に詠めばよ めでためでたの高砂よ
この浦舟に帆上げて 結び合わせて縁となる
金襴緞子の帯締めて 今日は嬉しやお嫁入り
ほんにおまえは果報者
これもひとえに皆様の 厚い情けの賜と
受けたご恩の数々は 決して忘れるものじゃなし
これから先の日暮らしは 幸か不幸か知らねども
永久に契りし、その上は
暑さ寒さに気をつけて 波風荒き人生を
互いに手を取り乗り切って りっぱな夫婦になるように
母は 両手合わせて祈ります
まだまだ未熟なもの故に どうぞ皆様これからも
行く末永く頼みます
どうぞ皆様 頼みますよ



昭和 42 年、漁願相撲当日、港内の船は日の丸・大漁旗を掲げる。

第5章 串木野の小型和船（帆船）



----- プロローグ -----

昭和38年頃まで、串木野の五反田川の河口の砂州には、帆船が帆柱を列べていた。

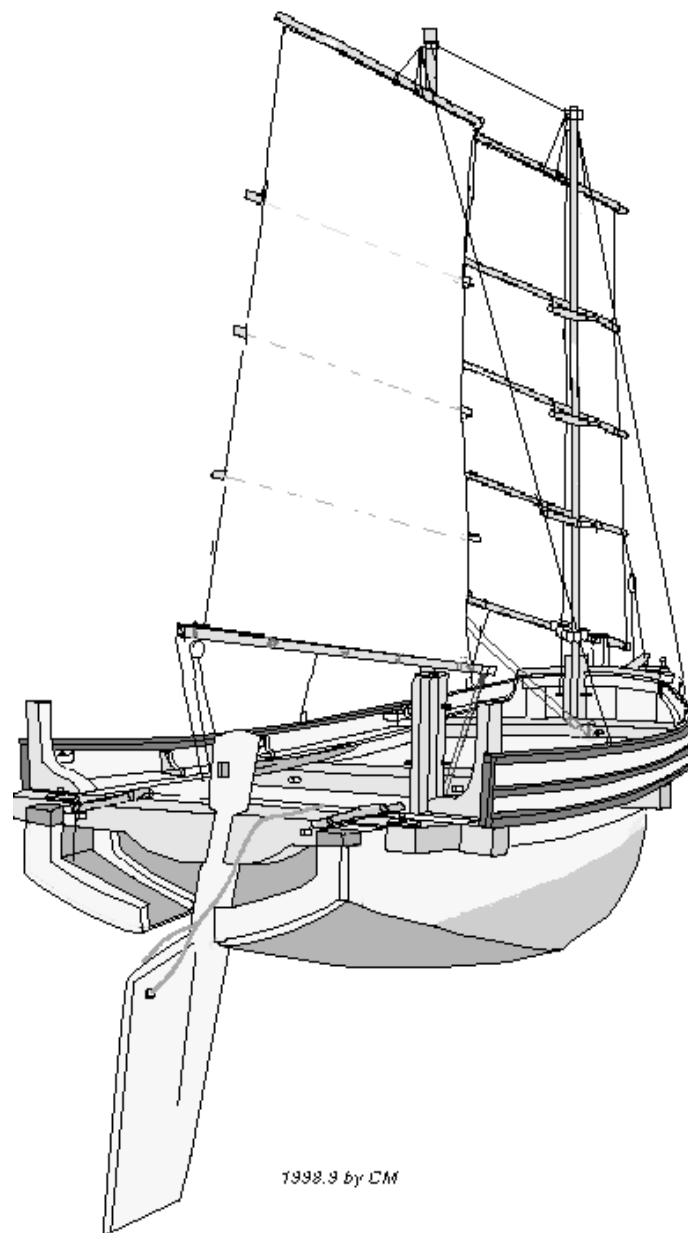
夜明け前に出帆した船は午後になると、帆に風をはらませて疾走して帰って来る。河口の入口で、すーと帆桁を下げて、その勢いで舵を操り、岸に正確に近づき、すばやくもやいをとっていた。船乗りは、ねじりはちまき、夏は上着に褌一つ、冬はドンザを着込んで腰巻き姿、赤銅色の顔が漁師としての誇りさえ感じさせる。船乗りの女房は、船が見える前から岸に立ち、桶を持って船が着岸すると、魚を選り分け、天秤棒で担いで近くの市場に運んで行く。天気の良い日の港（河口）での風景であった。



串木野の小型和船については、昭和初期から昭和30年代の頃、祖父や父が漁労をしていた一本釣り漁船について纏めた資料である。この和船について、船大工の技術が記録として残っているものが少なく、船体模型は串木野市立図書館に展示されている。

筆者は、小さい頃、串木野の五反田川河口で舳いをとっていた小型和船を再現したかった。帆走、漁労については漁師であった父（南竹 纓二、畑山 栄蔵）や古老に聞いたものをまとめたものである。

南竹 力



5-1 串木野の小型和船（帆船）

5-1-1 串木野の小型和船の特徴

串木野で一本釣り船は、従来の大和型和船とは、船体構造はほとんど同じであるが、甲板を設けたり、肋骨を挿入したりして、改良が加えられている。また、動力は帆走のみであったが、だんだん機械化が進み機帆船として発達してきた。

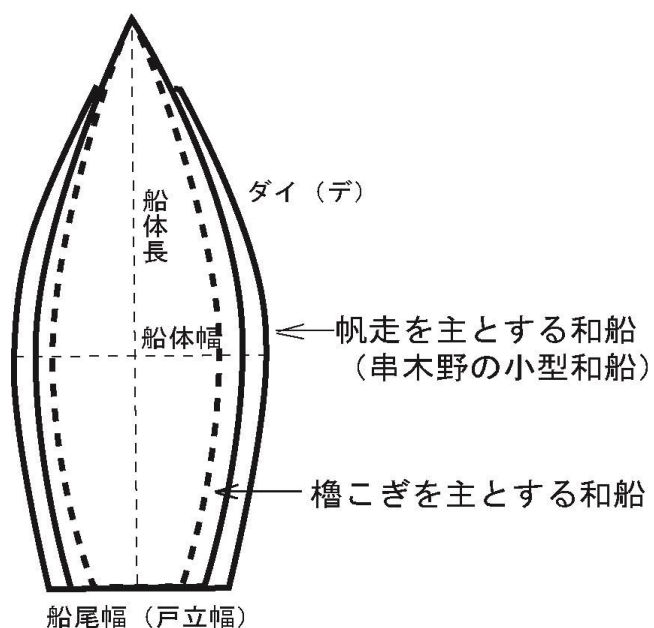
大正の頃より船体は改造され、「スイタ張り」から「デッキ張り」となり、デッキには物入れの箇所はサブタ（蓋）が設けられ、ロープや道具（ショドツ）はこれに収められ、雨や波しぶきも入らなくなり、荒天でも安全な航走ができるようになった。

特に、帆の構造、帆走の仕方については、南九州、日向、天草地方について、同様のものが見られる。それぞれ、地方の海岸地形や漁法に合わせて独自に発達してきていて、地方の特徴を持っている。明治以降の西洋の帆布も輸入され、西洋帆の技術が取り入れられていると思われる。

帆は、西洋帆船のガフリグの帆形にも良く似ている。帆は前後2枚の帆、追手風の時はヤ帆（矢帆・弥帆）も使われた。帆布は麻織布から、キャンバス（綿織布）が使われるようになった。

櫓を主としている和船は、五丁櫓、三丁櫓で漕ぐため、ウラダナと台（ダイ・デ）の間のヌキに櫓床（ドドコ）が付けられる。また、船体長/船体幅を大きく、戸立幅/船体幅が小さく取っているため、スマートな船形になっている。従って、船体抵抗も小さくなる。

串木野の小型和船は船尾に櫓一丁を持ち、帆走を主としていたため、櫓漕ぎの船に比べて船体幅が広く、戸立幅も広く取ってある。また、幅を広げるためダイを付け、波返しの板を張り、甲板状になっていた。帆走時の風に対する安定性を重視することと、作業性を確保したと思われる。



和船は繫留場所が砂浜であったため、舵やスクリューの取り付けに工夫がされていた。
 南九州の小型和船は、漁師の漁労の方法、その漁港の地理的条件や船大工の造船技術によって、少しずつ独自に発達してきている。
 したがって、それぞれの地域での和船の資料を収集することは大変興味深いことである。

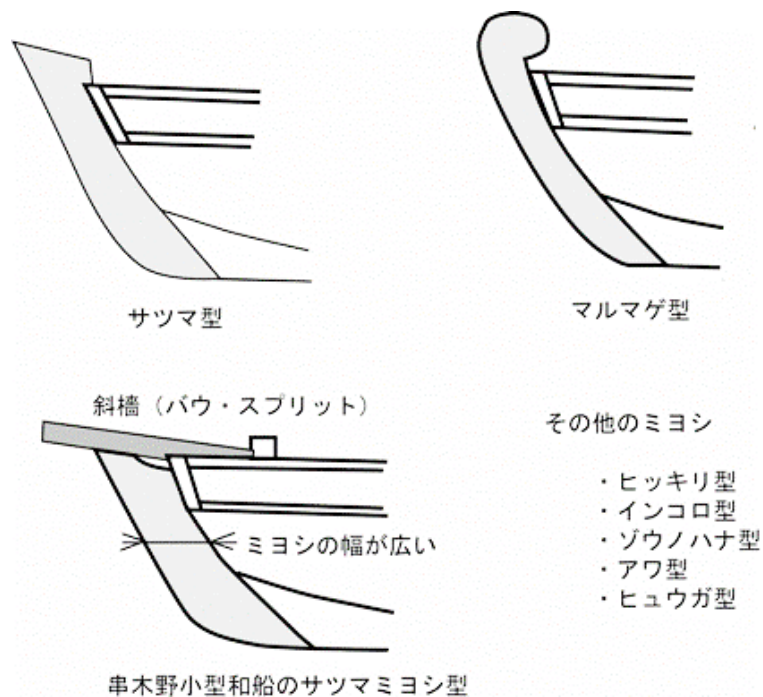
5-1-2 ミヨシ

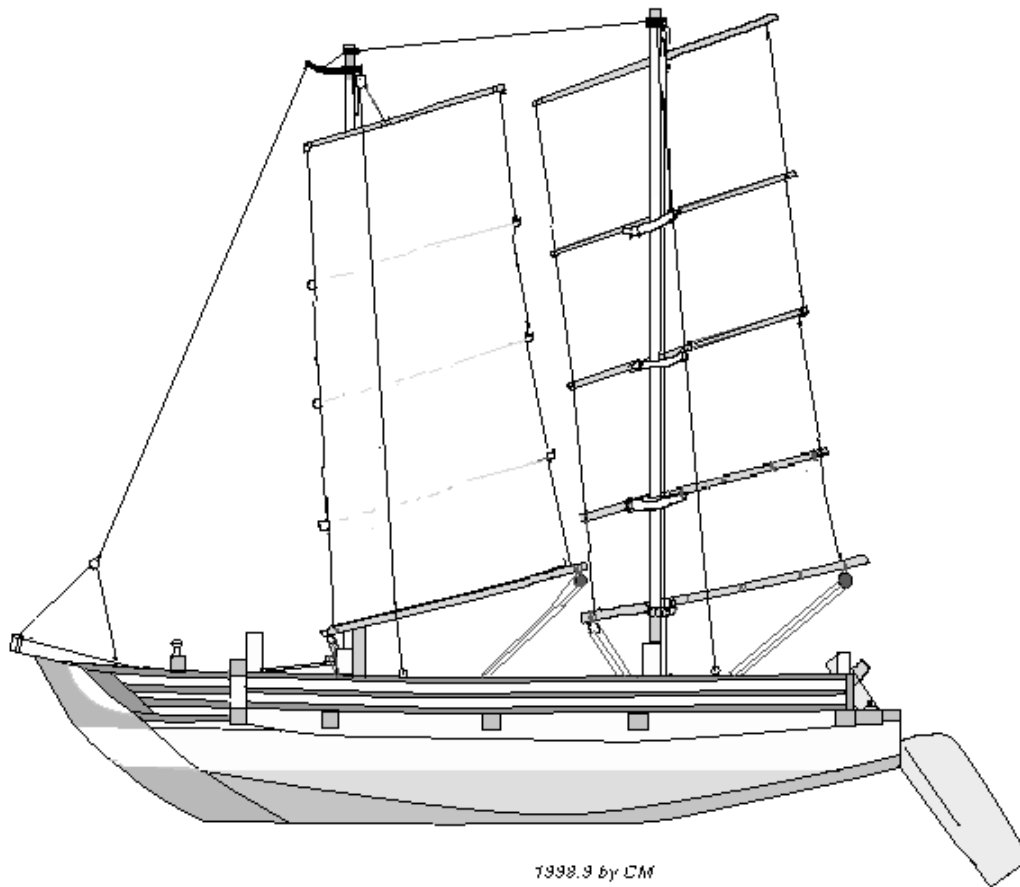
ミヨシとはミオシ（水押し）から転じたものであり、船首、舳先のことである。

串木野の小型和船の船首材（ミヨシ・ステム・バウ）は、板状になっていて、船横からみても広い。たぶん、これは、キールを持たない和船では、船首（バウ）と舵（ラダー）を組み合わせる風による横流れを防止するのと、帆にかかる風圧中心による船体の回り（ヘルム）を押さえているのではないだろうか。

串木野の多くの小型和船に船首に斜檣（バウ・スプリット）がみられる。しかし、斜檣は船首より、小さいスプリットが少し突き出しているだけである。西洋帆船でいうバウ・スプリットとは少し趣が違う。

西洋帆船の場合、なるべく帆の面積を大きくとるために、ジブセール（三角帆）を多くつけるために取り付けられている。小型和船の場合は板状になった船首材の補強と前帆柱（前檣）を支える「ハンズ（フォアステー）」を縛るために使われているようだ。

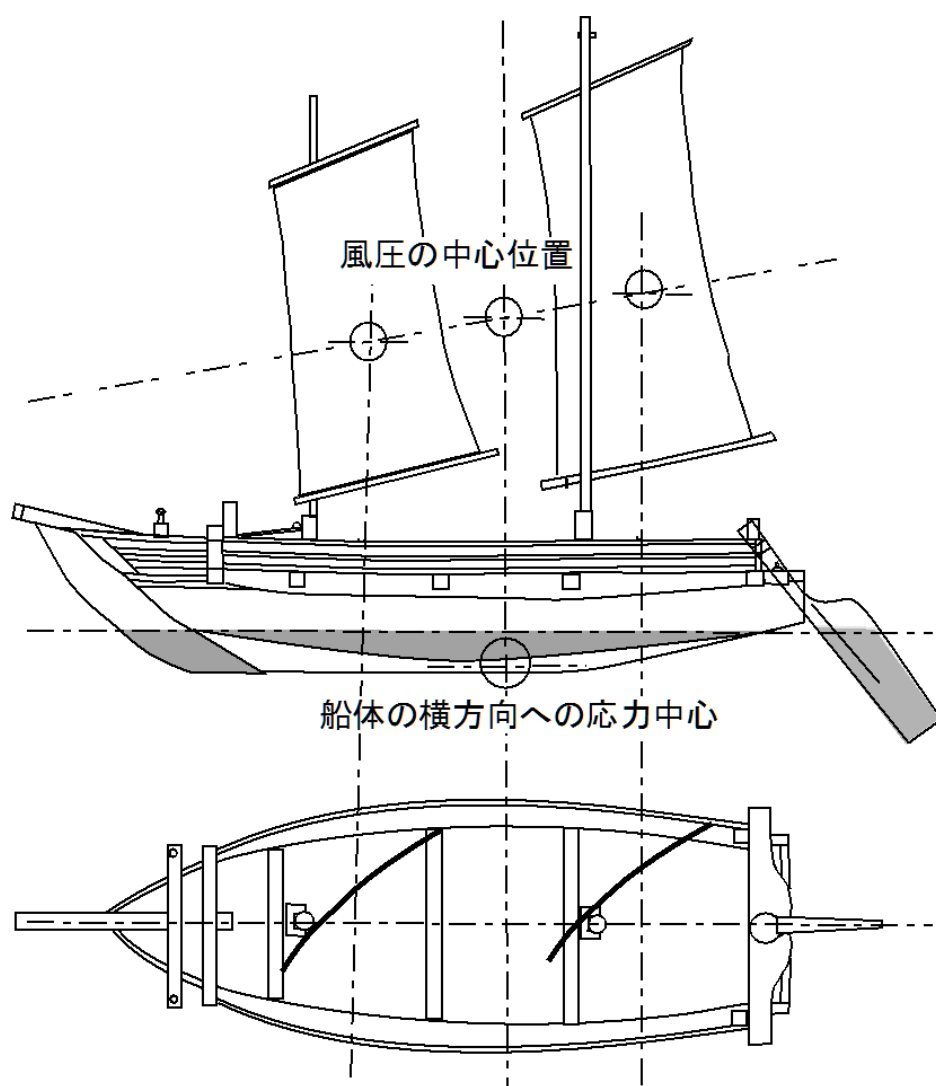




--- 船体の横から見た帆走図 ---

5-1-3 和船のヘルムとヒール

串木野の和船のミヨシは、板状になっていて、船横からみても広い。また、舵も広くつくられている。帆は通常は2枚が多い。その他に矢帆、三角帆などを付ける場合がある。現在のヨットの三角帆の場合、1枚帆で、風圧の中心がマストよりも離れているため、ヨットは風上側に回転しようとする。(ウェザーヘルム)、そのため、舵を使って保針しなければならないが、舵を効かすことは大きな抵抗になり、船足が落ちる。和船のそれぞれの帆はマストの中心に近く、2枚帆になっていて、船体全体にかかる風圧の中心は船体の中央部にあり、ヘルムが起こらない。ヘルムによる回転を舵に頼らないので、舵は大きくても抵抗にならなかったのだろう。その分、ミヨシと舵の喫水下の面積分が船体の横流れを防ぎ、切上がり性能が良くなる。



和船はヨットのようにヒールして、帆走するようには設計されていない。

特に南九州地方の和船は外板（ソトイタ・ナカイタ）から 160～250mm 幅の出っ張り

（ダイ・デ）があり、最大復元力は 20～25° 程度であり、35～40° 以上になると海水が流入する。急なヒールにより、海水が流入した場合、船内から海水を排出するのは大変な作業であったと思われる。デッキ張りになり、排水口を設けたりして、海水の流入を防ぐことができるようになった。もともと漁師は地元の気象に熟知していて、早めに縮帆し、安定して帆走したことだろう。水面下におけるミヨシと舵の面積の広さは、突風などによる風圧の変化を防ぎ、急なヒール押さえることができた。

5-2 船 体・ 艀 装

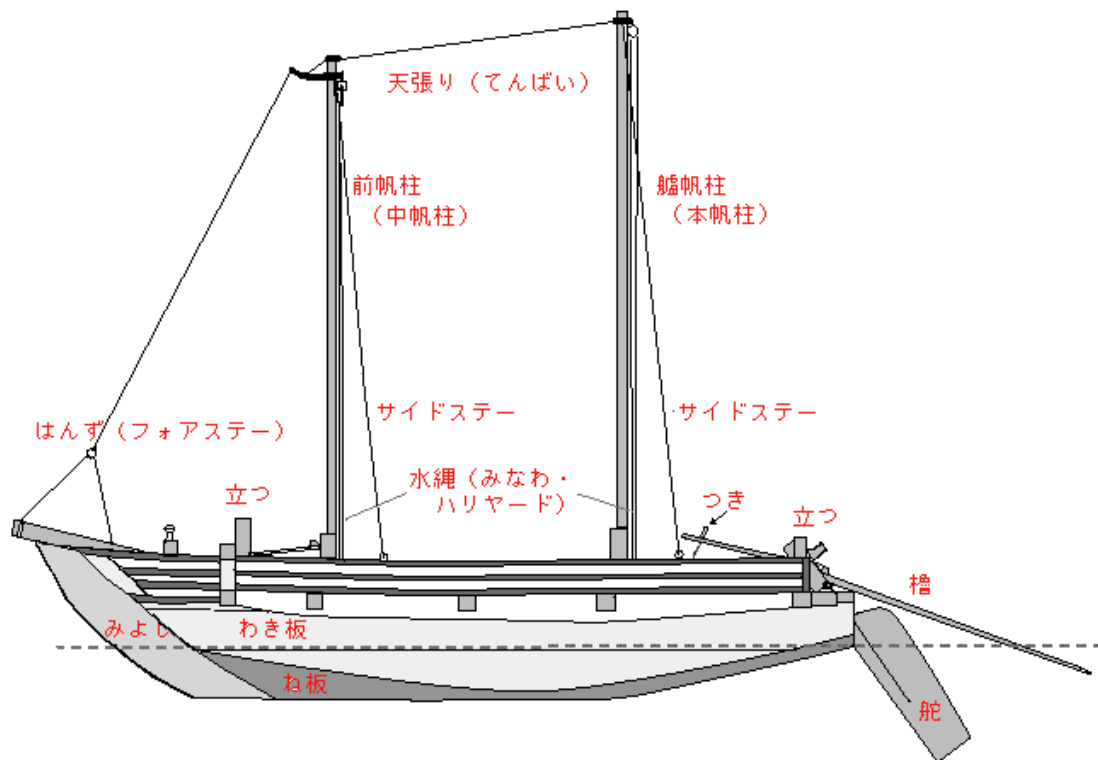
5-2-1 和船の構造

和船の構造は底板（カワラ）、舷底板（ネイタ）・舷側板（ワキイタ・ナカイタ）と呼ばれる板を接合し、船梁（ヌキ・ハリ）で補強した構造になっている。船梁の下には、仕切りと船体の補強を役目をした。戸立て（トダテ）という、厚めの板を形に合わせて固定してある場合もある。串木野の薩摩ミヨシ型は舷側板の上部に張り出した上部舷側板（デ、ダイ）があった。乾舷を高くすることができ、波返しの役目と甲板の面積を広くとることで船上での作業性を良くすることができたのだろう。

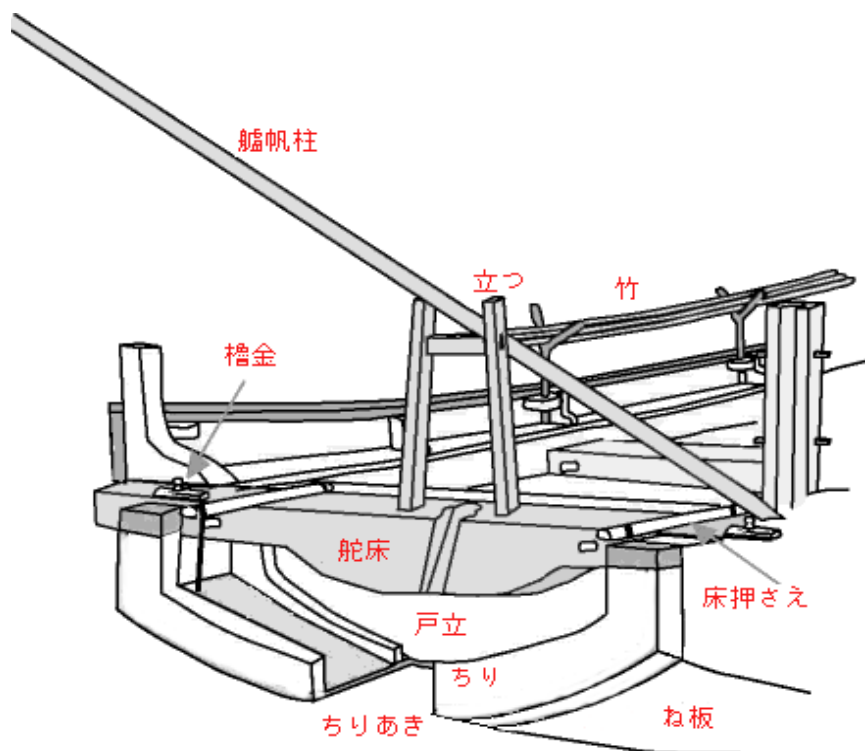
（三丁櫓、五丁櫓で帆走を補助とする和船ではダイ（サシイタ）とワキイタの間に隙間があり、櫓を差し入れて、漕ぐようになっていた。串木野本浦の小型和船では、櫓は船尾に一丁で、ダイとワキイタの間は、板で仕切られ、海水が入ってこないような構造になっていた。）

カワラ（船底）には、船底に沿って 2～3 本の「打付けスラシ」を取り付ける場合もある。河口で着底した場合や揚げ降ろしの場合の船底の保護するためである。

船首を「オモテ」、船尾を「トモ」、左舷を「トリカジ」、右舷を「オモカジ」と呼ばれる。船首の舷側板から 1 尺程度出たヌキに八頭（ヤツガシラ）と呼ばれる飾りが付けられていた。船大工は船主の好みに応じて、ミヨシに彫りや船首部の帆棚の部分に飾りを入れたりしていた。中帆柱の上部には、金具が付いていて、帆の上桁がハンズに引っかからないように、工夫されていた。



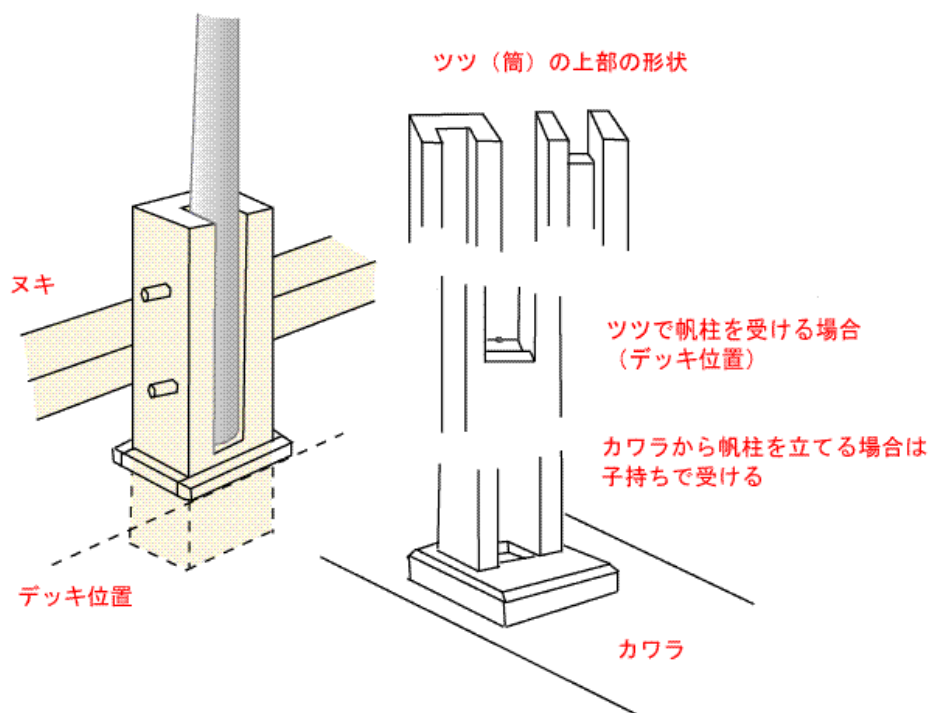
船首材（ミヨシ・ステム）は、板状になっていて、船横からみても広い。たぶん、これは、キールを持たない和船では、船首（バウ）と舵（ラダー）を組み合わせで風による横流れを防止するのと、帆にかかる風圧中心による船体の回り（ヘルム）を押さえているのではないだろうか。串木野の薩摩ミヨシ型は船首に斜檣（スプリット）がみられる。しかし、斜檣は船首より、少し突き出しているだけである。板状になった船首材の補強と前檣への「ハンズ（フォアステー）」をとるために使われている。

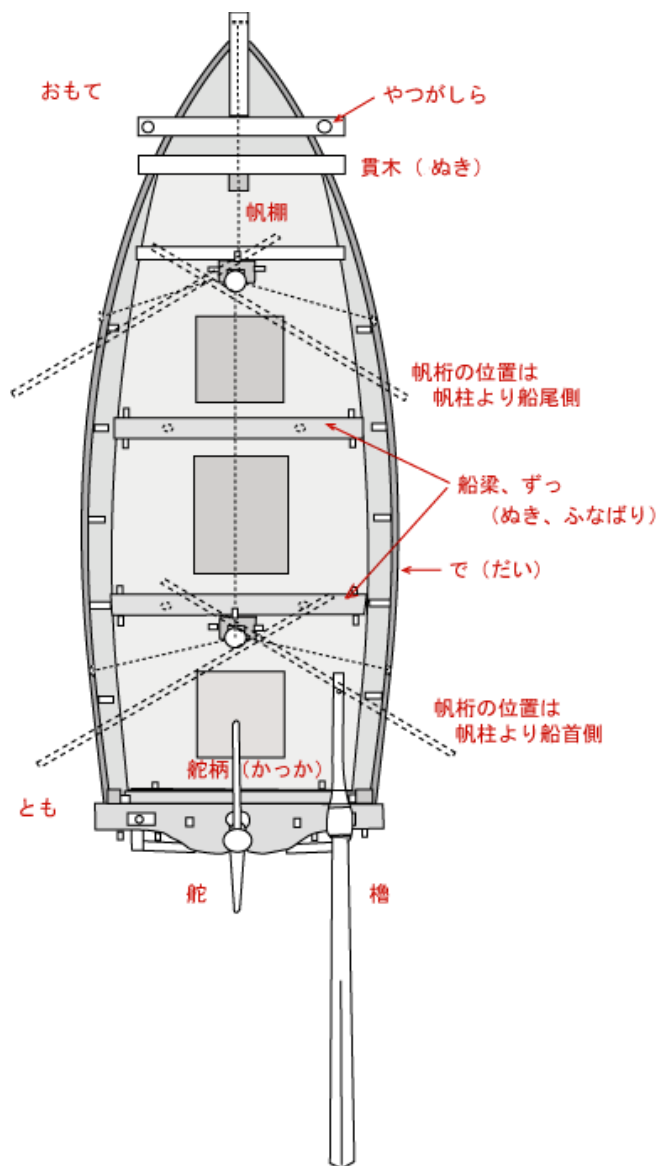


帆柱はツツ（筒）と呼ばれる台座に固定する。

大櫓（艫帆柱）を倒すときは舵床の上の「立ち（タチ）」に立てかける。

帆走を主とした串木野の和船は、大きなツツの中に帆柱が入り込むようになっていた。





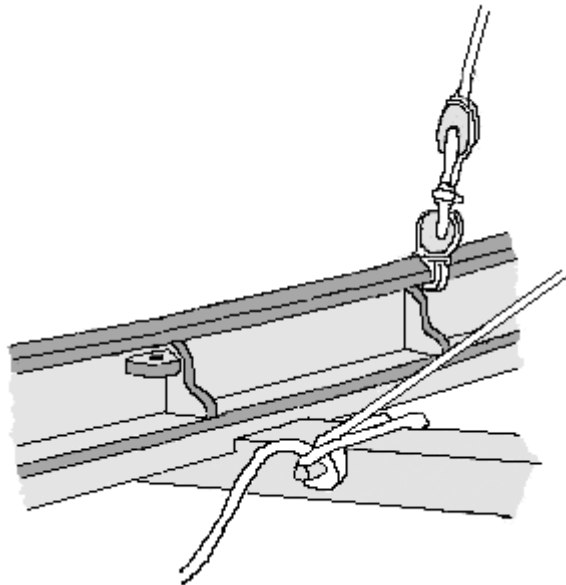
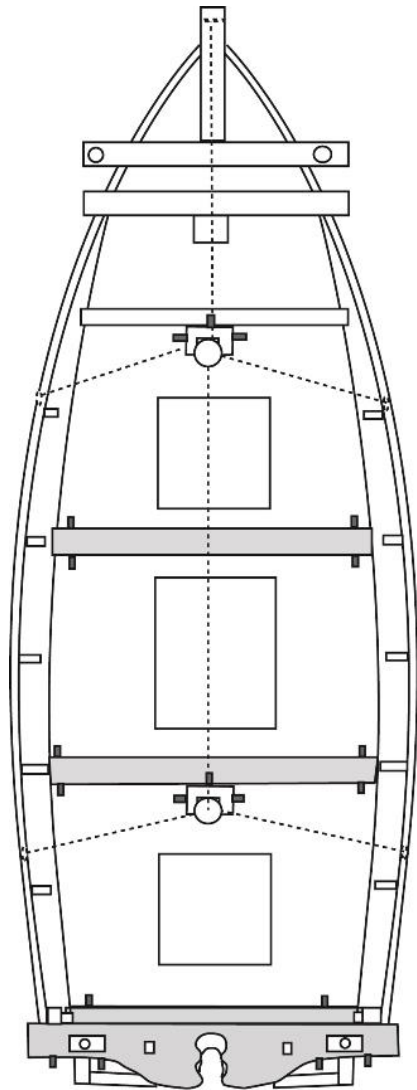
帆柱と帆桁の位置は追風で観音開きにした場合、帆桁が帆柱の風下になるように固定させている。帆桁は帆柱に「挟ん竹」と「うち回し」によって、自由に回転できるようになっていた。「うち回し」は下帆桁（ブーム）に付けられているが、船によって取り付けない場合もある。舵床は船体構造の一部ではなく、床押さえによって固定されているので、舵穴が消耗したときは交換する。舵穴にはグリースなどが塗られる。船体は船梁（はり）によって仕切られ、船首より、ドウノマ（胴の間）、ツツノマ（次の間、筒の間）、トモノマ（艫の間）と呼ばれていた。

船体の喫水線下は石油系の塗料が無い時代は、フカ油を塗って、木材の煤を擦り込んだり、船底塗料としていたようである。コールタールも使われていた。また、船底についた貝殻などを取るのと船虫退治に船底に満潮時に枕木（ジン、スラシ）を敷き、干潮になってから、松葉（アヤ）を集めて焚き、船底の

手入れを行っていた。

雨などが長く続いたりした場合は、簀の子の下に溜まったアカをくみ出す。いつも、船体の防腐のために塩抜きになった船体には塩水をかけておくことが必要だった。その後、オンデッキ構造（デッキ張り）になり、石油系の塗料を使うようになってからは手入れも楽になってきた。

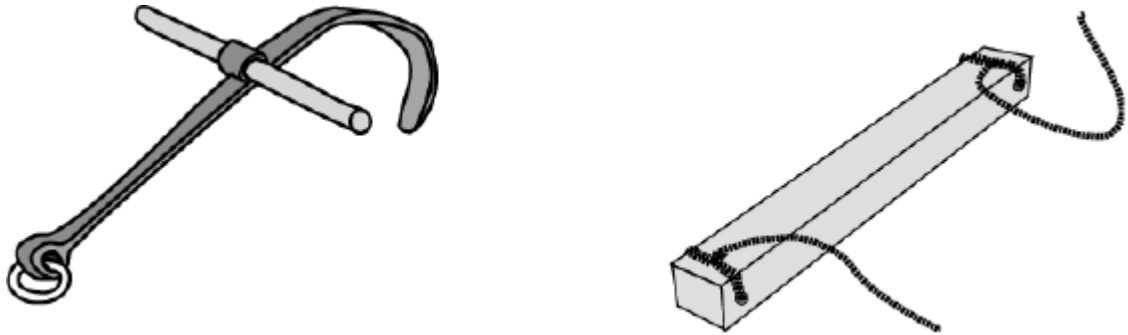
ロープ（綱）を止める場所は、次図に四角（黒）で示したように帆柱のツツ（筒）、貫木、舵床に、ピン（木栓）が付けられるようになっていた。舵床や帆柱のツツ（筒）は固定したピンになっており、貫のピンは取り外しができるものもあった。操船時、足などを引っかけないような安全な位置にあり、ピンは短い。



ロープワーク

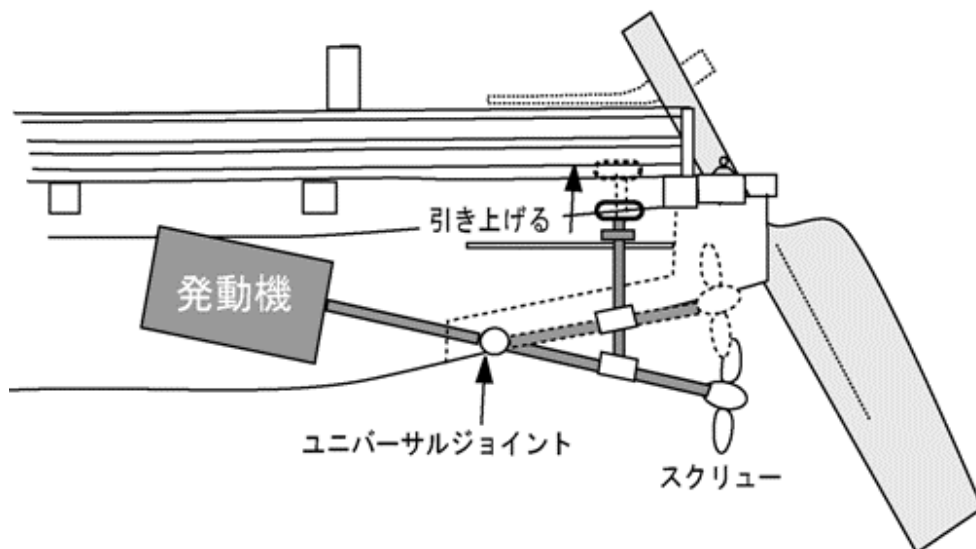
船は砂州に係留することが多く錨は片爪錨（片手錨）を使った。これは潮が満ちているときなるべく岸に近いところに、錨を打ち係留する。

次に入港してきた船が錨の位置に係留した場合、干潮になったとき、両爪錨だと、その錨の上に船体が増り上げてしまうので、相手の船体が傷ついてしまうことになる。そのため、片爪錨となった。



5-2-2 機 帆 船

戦後、小型和船も機械化が進み、速力も増し、風力だけの操業からすると、安全、かつ迅速に漁労に従事することができるようになった。燃料の節約も兼ねて、帆走のみの場合は、プロペラシャフトにユニバーサルジョイントつけて、シャフトを曲げて、スクリューを根板の内側へ納め、帆走時の船体抵抗を少なくするようにしていた。また、砂地へ繋留するときはスクリューを痛めないようにするため、同様にスクリューを根板の内側へ納めていた。



5-3 舵・帆

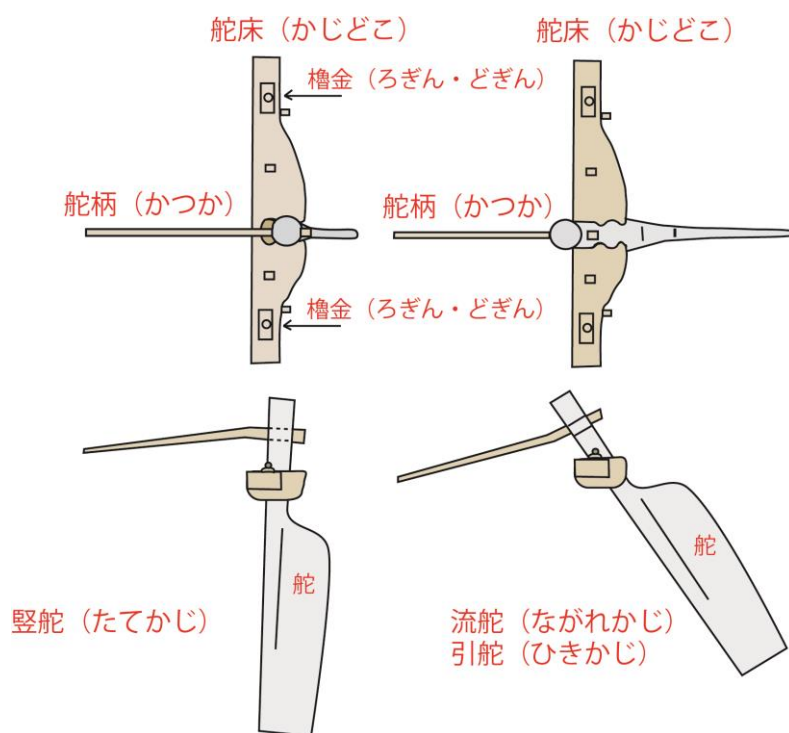
5-3-1 舵

舵（ラダー）の水面下の面積は現代のヨットに比べて広い。センターボード、フィンキールを持たない和船の場合、横流れを防ぎ、風上への切り上がり角度を大きくとるためには必要であった。舵は船にとっては、最も重要な部分であり、舵が壊れることは、漂流や遭難を意味する。舵床は風上に進むとき（クローズホールド）、風下に出るとき（ランニング）と舵の挿入位置（舵穴）が違っていた。それぞれ堅舵、流舵（引き舵）という。舵柄（カッカ・ティラー）は舵のはめ合いの部分で曲がっており、堅舵、流舵でも舵柄が上下しないで操船できるようになっている。

堅舵の場合、舵の水中部の中心点が深くなり、船体のヒール(傾斜)を押さえ、その中心点が船体寄りになることで、ウェザーヘルム（進路が風上に向かう状態）を少しでも改善できる。また、流舵の場合、水中での舵の抵抗が減り、船足を速くすることができる。

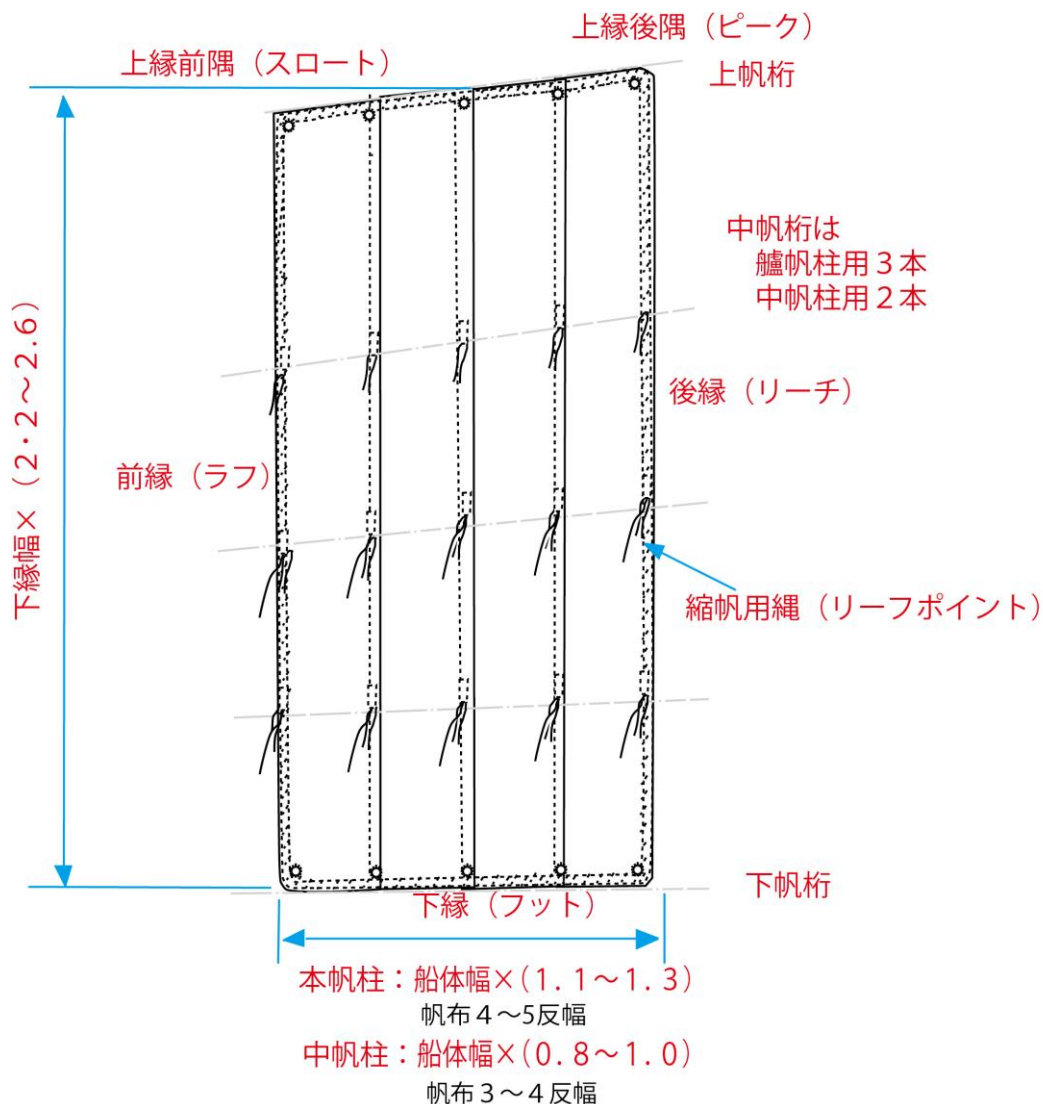
舵床は松材などで作られていて、船体の一体の構造物としてではなく、取り外し可能なように、船体にははめ合いとなっており、床押さえて固定されている。

舵と舵床の接触部は松脂油を塗って、摩擦による磨耗を防ぐと共に、適当な締め方で舵が動かないようになっている。舵は桹材を使い、その形状や大きさによって、船足や切り上がり角度に大きく左右する。



5-3-2 帆

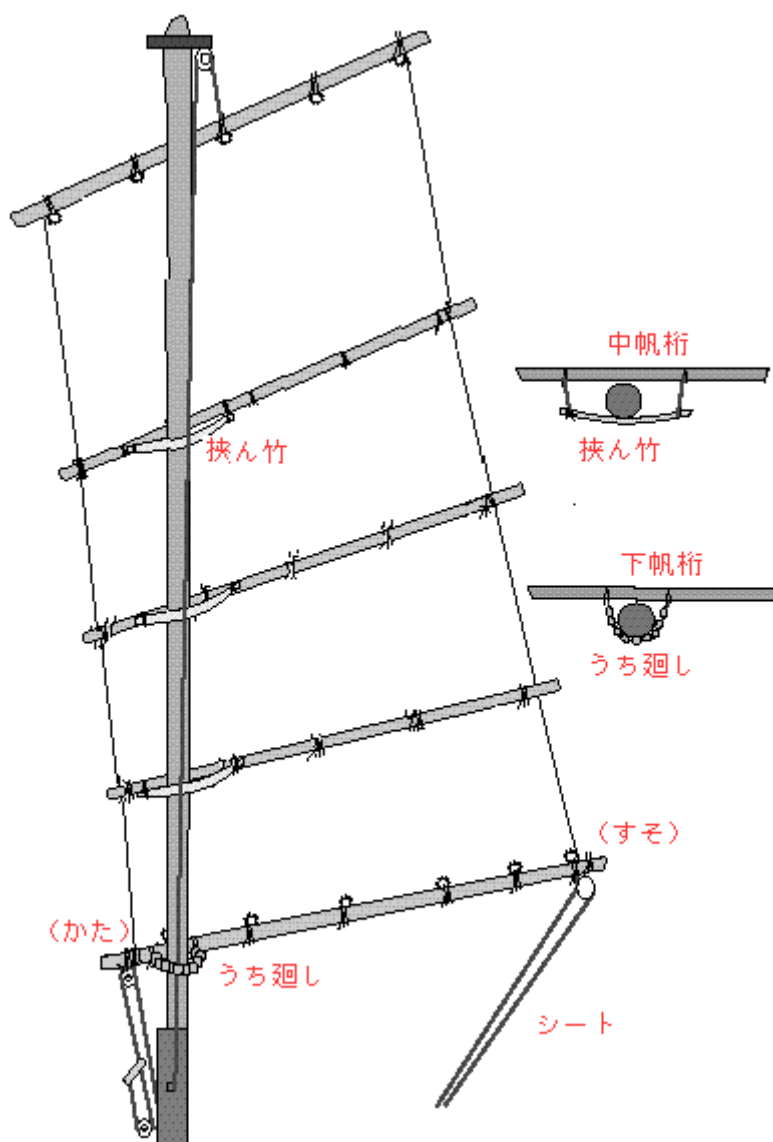
串木野の小型和船の帆（セール）は、日本の大和型和船に見られる横帆の帆形とは違い、西洋のガフリグに近く、また、江戸時代の絵巻物などに出てくる琉球帆船の帆形に近い。しかし、どの時代でそのような帆形になったのかはわからない。明治以降に西洋帆船の技術も導入されたのではないかとと思われる。帆布は縦に縫い合わせ、帆の端は縄（ヨマ・ロープ）が縫い込んであった。帆の上部の形状は風を流す方向に広がっているのは、弱い風でも十分、帆に捉えることができる。船体長6～7mの船（船幅2～2.2m）で帆の下縁（フット）の幅は本帆柱2.5m程度、中帆柱1.8m程度であり、帆の長さは上縁前隅（スロート）でフットの2.2～2.6倍程度、上縁後隅（ピーク）が上縁前隅（スロート）より10～15%程度長いことが記録写真等から推測される。



帆桁にはすべて竹を使い、上帆桁（ガフ）、中帆桁（2～3本）、下帆桁（ブーム）を帆に固定し。帆桁には縮帆用縄（リーフポイント）が付けられていた。

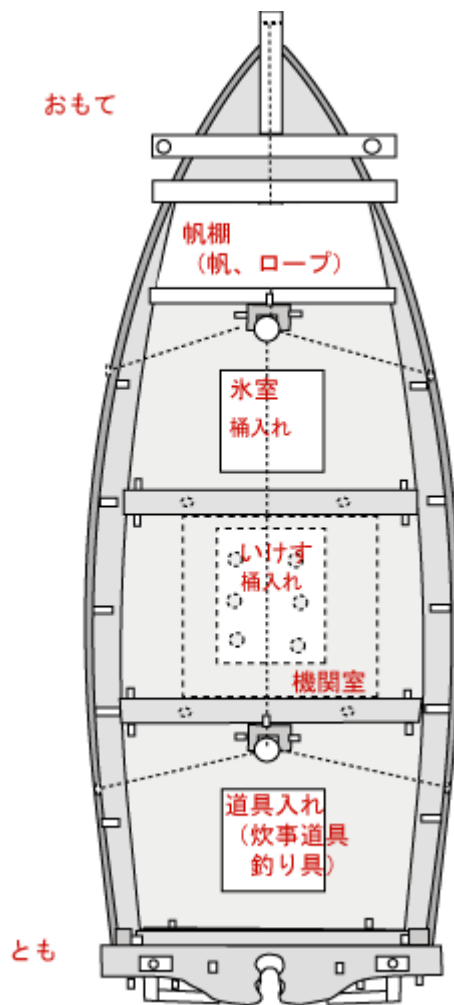
下帆桁には”うち廻し”という木を数珠のように縄を通したもので帆柱に廻して固定する。中帆桁には”はさん竹”とう竹を割って弓状にしたもので帆柱を挟み、風によって、帆柱から離れるのを押さえる。

地域によっては、下帆桁（ブーム）がなく、帆の下端（フック）にロープ（シート）を付けて、帆を左右に展開していた。



5-4 漁 労

5-4-1 キャビン



和船のデッキはほとんどが板張りであり、キャビン（居住空間）はない。小さな近海漁の和船は必要なかったのだろう。もともと漁師は時化たときは漁に行かないので当然のことである。漁師は、空模様や気温、風の動きを見て、その地域の天気を精確に予報できた。数昼夜を要して漁場へ出かける比較的大型の和船にも特別なキャビンはない。「とま」と呼ばれる簡単な簾を立掛けて、夜露を凌いでいる。

「トンコツ」（枕箱）と呼ばれる枕と「ドンザ」を着込んで寝る。「トンコツ」とは煙草入れのことであるが、枕箱にして身の回りの大事なものを入れていた。和船に風雨を凌げるキャビンがあれば、その漁労区域も広がったことだろう。

船倉の利用区分である。帆棚（ホダナ）は、ロープや帆などを格納する。一本釣りの小型船は桶にムシロを敷いて角氷を置き、更にムシロをかぶせて、出漁していた。

数日間の漁をする船は氷室に同様にムシロを保冷に使っていた。漁労・漁法によっては胴の間（ドノマ）にイケスを持っていた。船体の重心位置であり、イケスに海水が入っても、前後のバランス（トリム）が変化しないようにしてある。イケスは、布を巻い

た木栓を使っており、穴径はイケスの容積によって、海水の出入りが自由にできるように工夫している。

機帆船は、船体の重心位置にエンジンが据え付けられていて、エンジンのクラッチや回転数を調整するノブに、長い棒を付けて遠隔で漁師は艫の舵柄（カッカ、ティラー）の近くから操船する。艫の船倉は漁師が一番使う場所であり、炊事道具や釣り道具など生活道具が納められていた。

5-4-2 漁労海域

小型和船の場合は1日で帰港できる海域に限定される。夜明け前に出港して、15:00過ぎには帰港している。

陸風や海風の具合によって、漁師は帰港時間を見計らっていた。母港にも冷蔵施設のない時代、和船の魚の氷保存時間と市場での売りさばきを考えると、早めに漁労海域から帰る必要があった。

時化や1日で帰港できない場合は、漁場に近い港、島影や海岸近くに錨泊していた。

小型和船の場合は1人か2人の乗組みであり、通信手段を持たないので、家族は港で心配しながら帰港を待っていたことだろう。

魚種や釣道具は、海底の地形・地質や水深・海流、季節による風・気温で大きく変わる。吹上浜から串木野にかけての西海岸の海底は砂質であるが、所々に海底に岩礁があり、曾根（魚礁）となっていた。曾根の周辺は魚が多くいるので、山当てで場所を特定していた。また、帰港して漁の多かった漁船に漁場を聞いたり、次の出港の時にその船の後を追うこともあった。



5-4-3 山当て

父から良く言われたものだが、魚の当たりの良いポイントを見つけたらまず山を見よと、山と山の重なり具合、岬との角度などによって、釣れる場所を覚えておくことだ。つまり交差方位法（トランシット）で自船の位置を知る。正確な方位角を測る計器を持たない時代の知恵である。

串木野沖で、以下のような目印になる山や岬、島であつたろうと推測される。

- ・弁財天、愛宕山、白左衛門ヶ丘、火立ヶ丘、冠岳、唐船塚、遠見番山、矢筈山、諸正山、金峰山、野間岳、桜島、開聞岳、紫尾山
- ・羽島崎、長崎鼻、戸崎鼻、野間岬
- ・沖ノ島、甕島、久多島



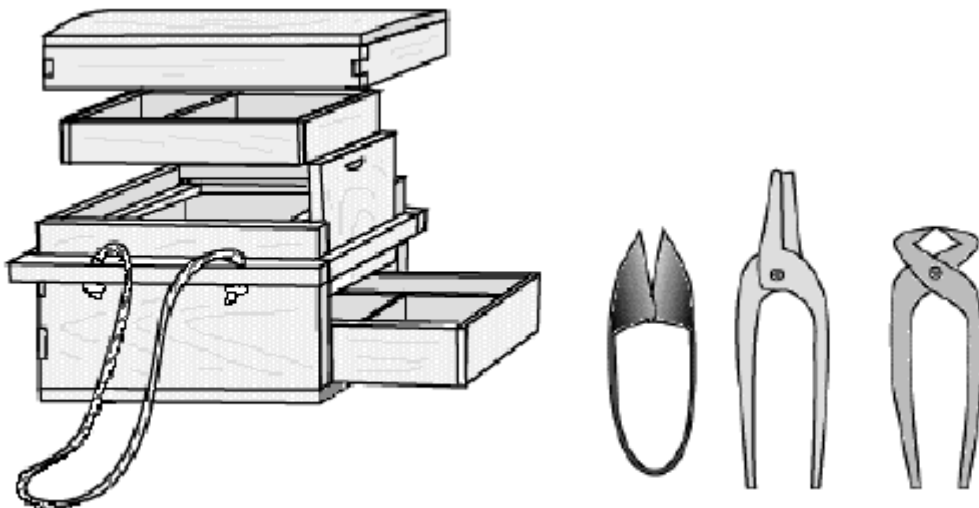
5-4-4 気象予報

筆者が小学校に通う頃、父は西の空と海鳴りの音を聞きながら、今日は雨が降るから傘を持っていけと言われ、本当に予想通りだったことを覚えている。ラジオの気象予報よりも正確であった。漁師は、長年の操業経験や先代から伝承により、さまざまな気象を熟知していた。

朝焼け、夕焼け、雲の形、気温、湿度、風の強さ、潮風の匂い、海岸の地形による海鳴りなどを六感を使って判断をしていた。漁師は、3時頃から床より起き出て、何時も決まった場所（川口）に集まり、海鳴りを聞いたり、古老の予報を聞いてから出漁する。漁を終えて、船の舳をとると、朝と同じ場所に集まり、釣果や明日の天気をお互いに予報する。

5-4-5 釣りの所作

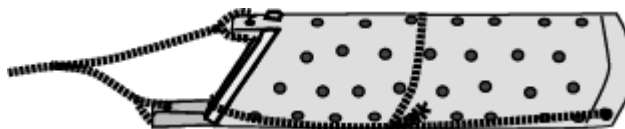
同じ漁場で漁師の釣りの所作を見るとどこかの港（浦）から、来た船が良く分かるという。それは、釣り道具の仕掛けにも一因するが、漁師の道糸（ナワ）のしゃくり方がそれぞれ、港（浦）によって違うらしい。どのようなしゃくり方だったのか今知る由が無い。テグス道具はドギ（ドッ）といい、それぞれ自分流に工夫する。（ドッつくい）
釣り道具を入れる箱はカラトという。カラトの語源は唐櫃（からと）に由来するのではないだろうか。被せ蓋の付いた方形の諸道具入れから、そう呼ばれたのだろう。



からと（はさん、やっこ、くれき）

5-4-6 餌入れ（エッパン）

漁師は時化や沖に出れないときや漁労が終わった後、川口や磯に海老取りに出かける。餌籠とタモ（ゴタツ）を持って行く。また、夫が漁労中に漁師の妻が海老取りをしたり、餌用に貝堀りをしたりする。活き海老は「エッパン」と呼ばれる竹に小さな穴をたくさん開けた筒に入れ、朝、出港するときに、艀にヒモを付けて「エッパン」を引っ張って走る。



えっぱん

5-4-7 係留地

船は干潮時に砂州になる場所を係留地としている。一つは、天然の良港であったこと。干潮時に船体が砂州に乗り上がるので、常時海水に浸っているよりも比較的に海苔、蛸などの海洋生物が付かない。干潮時に船体の手入れができるなどの利点があったのだろう。しかし、干満の時間が出入港に合わないときは、出港時は船を河口に移動したり、干満に合わせて係留地を変えなければならなかった。入港時も満潮になるまで沖合いで待つこともあった。

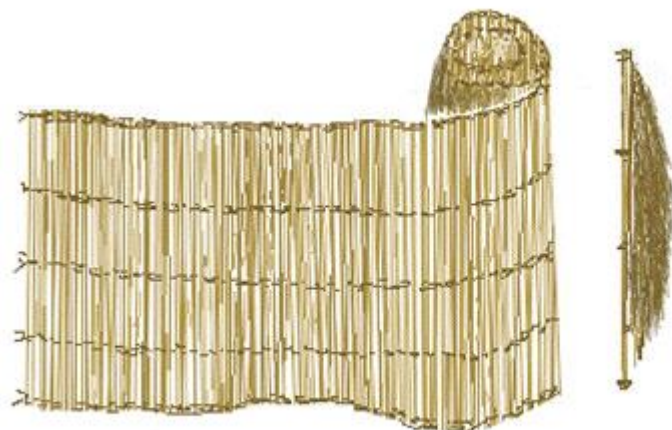
5-4-8 漁労着

船乗りは、ねじりはちまき、夏は上着に褌一つ、冬は「ドンザ」（さしこ着）を着込んで腰巻き姿でズボン類ははかない。入港時は川口で帆を降ろし、干潮近くになると川底が浅くなるので舵を引き上げ、竹竿を使って、船を川岸まで押す光景がよく見られた。竹竿で動かない場合は、船から海に入って腰の下あたりまで浸かり、ロープを川岸まで引っ張って行く。出港時はある程度、櫓の漕げる河口まで、竹竿などで移動し、海に出てから、帆を展開する。そのような時は褌姿が都合がよい、腰巻きは上にめくって腰紐に止めれば濡れなくてすむ。

<ドンザ>

「ドンザ」（さしこ着）は防寒用の綿入り半纏みたいなものだが綿は使わない。膝下まであり、木綿の生地で、船乗りの女房は、着物の端切れがあれば当て縫いをしていく。やぶれを繕うのではなく重ね縫いをしていくのである。そうすることによって。海水がかかっても、乾きが早く、保温が利いた防寒着になるのである。

5-4-9 ト マ

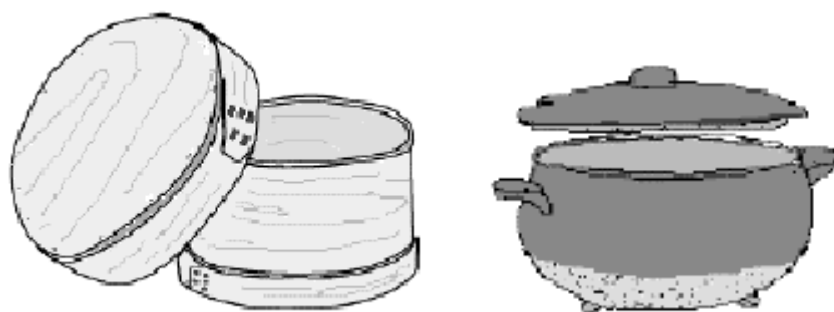


C.7m

茅を数本束ねて麻縄で編んでつくる。編んだ面の反対側は簀と同じような作りで、水が編んだ面に流れ込まないようにになっている。厚めで一畳程度のトマは冬の北風が強いときの漁労時の寒さ除けになり、波浪が高いとき、差し板に立てかけて波のしぶきがかかるのを防いだ。また、夏の日差しを遮り、雨除けにもなっていた。船上では便利な道具（ショドッ）の一つである。

5-4-10 食 事

早朝、空が白んでくる前には、沖へ出かけていたので、「ガエ」には、二食分のご飯が入っていた。水は一升瓶に入れて持ってゆく。また、「スイコガエ」には汁物を入れて持ってゆく。「ガエ」の中には梅干し、漬物などが添えてあったことだろう。



がえ・すいこがえ

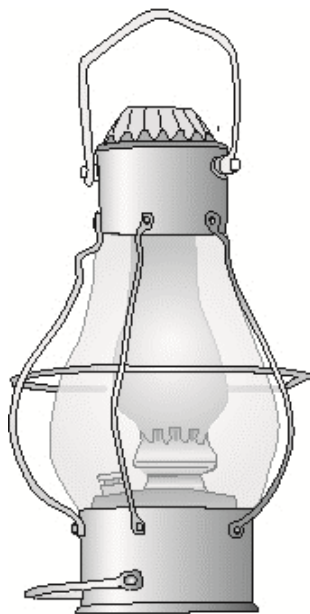
5-4-11 ランプ

小型和船の場合は朝早く出港して、夕方には帰港する。朝出かける時や夜の帰港、夜釣り等を行う場合、今のような蓄電池(バッテリー) などのない時代は石油ランプが使われていた。

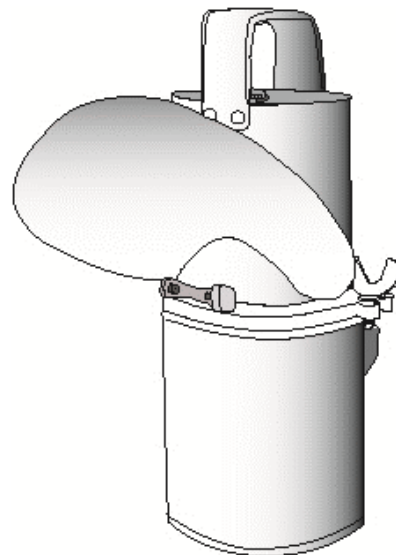
石油ランプはガラスとガラス保護の金属枠のついた外部カバーと内部ランプが取り付けられた構造になっていた。外部カバーと内部ランプの脱着は簡単にできる。内部ランプ本体に点火して明るさを調整、外部の防護カバーに底部から挿入して、内部ランプを固定する。カーバイトによるアセチレンランプが漁労に使用されているが、いつ頃から使われたのかわからない。

本浦地区では、旧漁業協同組合事務所の横に石造り倉庫があり、漁協でカーバイトを販売していた。蝶ネジを緩め下部タンクと分離して、上部タンクに水を入れる。下部タンクにカーバイトの固まりを入れて、ゴムパッキンを挟んで蝶ネジをしっかりと締める。注水器(つまみ)を回すと上部タンクから水滴が落ち、カーバイトが化学反応し、アセチレンガスが発生するので、火口より出るガスに点火する。カーバイトの独特の臭いがするが二つの火口に火をつけるとかなり明るい。雨風にも消えることはなく、調整すれば4～7時間は点灯している。

小さい頃(昭和30年代)、六月灯や夏祭りの夜店はアセチレンランプを使っていて、揺れる炎の明かりの中を歩き回ったことを思い出す。



石油ランプ



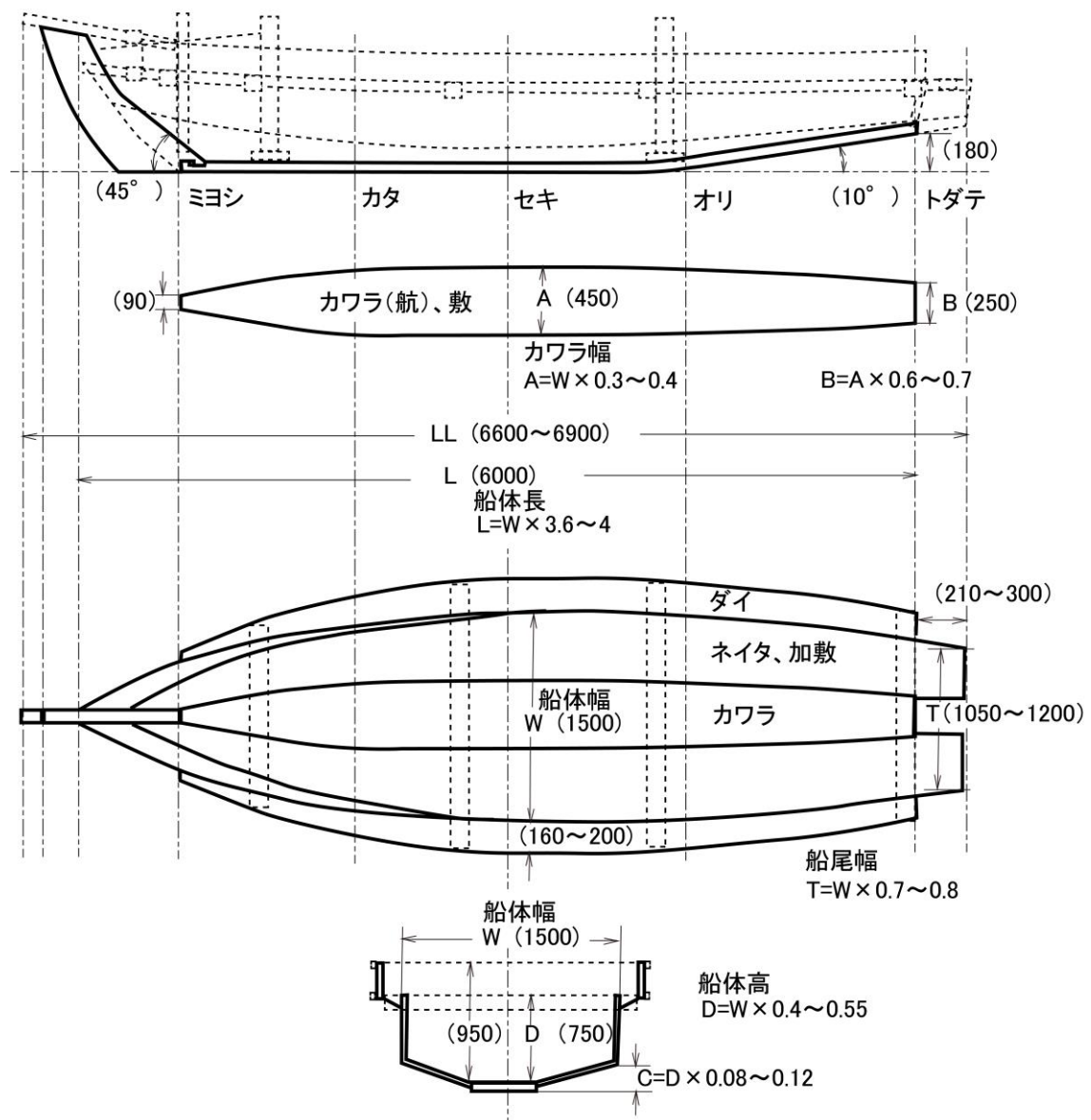
アセチレンランプ

5-5 和船の構造と造船技術

5-5-1 船体構造

和船の構造は船底板・航・敷（カワラ、シキ）、加敷（ネイタ、カシキ）・舷側板・棚（ワキイタ・ナカイタ）と呼ばれる板を接合し、船梁・貫（ヌキ・ハリ）で補強した構造になっている。下図に概略（推定）の寸法を記す。

※（）内の数値は一人乗りのサツマ型の概略寸法です。



船幅が 1.5～1.8m（4 尺～6 尺）の場合、

- ・ 船丈は約 4 倍
- ・ トモの幅は船幅の 70%
- ・ カワラの厚みは 1.7～2.6 寸（51～78mm）、
幅は中央で 1.2～1.4 寸（360～460mm）、トダテで 7～8.8 寸（210～265mm）
- ・ ネイタ・ネイタの厚みは 0.8～1.2 寸（24～36mm）

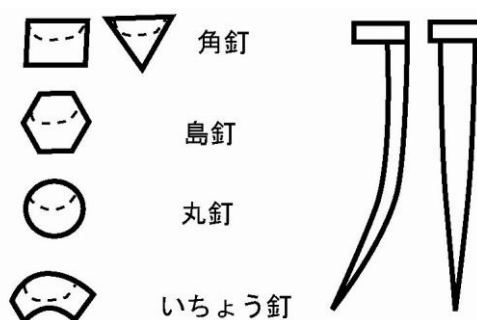
と推定される。

5-5-2 船材と船大工道具

＜木材＞	船 体：	杉、松	ミヨシ：	檜、樺、椎、楠（曲がり材）
	梁・小縁：	檜、松、杉	帆 柱：	杉
	舵 床：	松	舵：	樅
	櫓：	樅、椎		

補強や用途に応じて 樺、椎、楠を使う。交通機関のない頃は、地元で取れる木材を調達していた。松、杉などは地元の潮風を受け、生育に厳しい環境にある材木が良質な船材として使われた。

- ＜船釘＞
- ・ オトシ釘：頭が小さい、板の接合などに使う
 - ・ カイオレ釘：頭が三角 コベリなどを止める
 - ・ トオリ釘：頭が大きい カジキ 上タナを止める
 - ・ スベリ釘
 - ・ 矧釘、縫釘



釘穴の間隔（釘間、心距）は、船の大きさによって異なるが、間隔は 4.5 寸、5 寸、6 寸、6.5 寸の間隔で、ノミで四角形に彫り込み、ノコズリ、木ころしを行って、釘を打ち込む。彫り込んだ溝穴は堅木でコミセンをする。

<鋸>

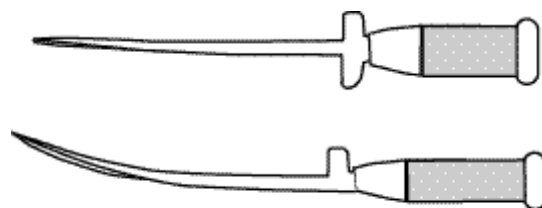
- ・アラバノコ
- ・ナカバノコ
- ・コバノコ



ヒキマワシノコ

<ノミ>

ツバノミ : 板の接ぎ合わせに用いるノミ
(ヨコギリノミ、クギサシノミ、カタツバノミ)



リョウツバノミ・カタツバノミ

5-5-3 ネイタ・ナカイタの曲げ、カワラとの接続、コベリの取り付け

ネイタ・ナカイタは厚みが 1 寸程度まではジキマゲ（直曲げ）するが、それ以上になると、外側から木屑を焚きながら、板に水を打ちゆっくりと曲げてゆく。

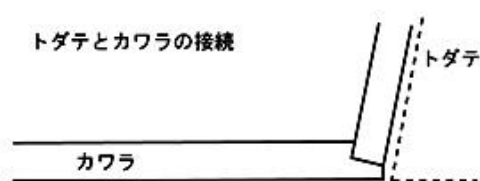
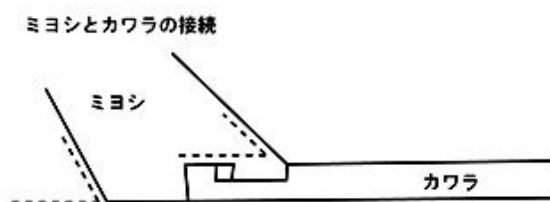
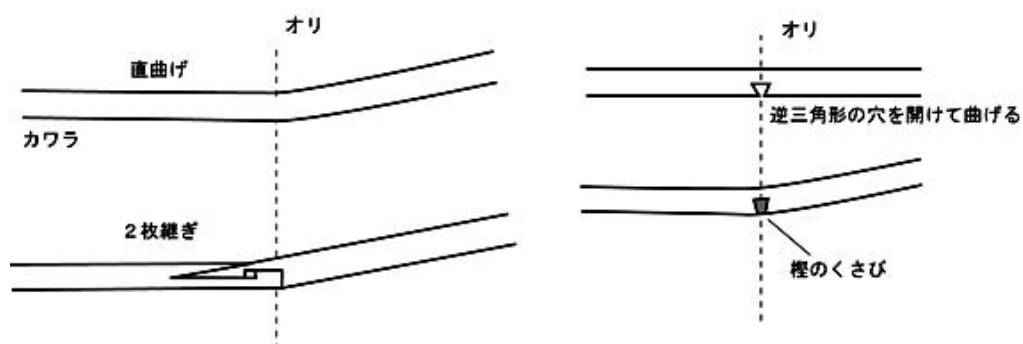
カワラは、オリの位置から 10° 程度、曲げるが、大きな船は 2 枚継ぎにする。

オリの底部に 5 分(15mm)程度の逆三角形の鋸目を入れて曲げ、櫓などでセンをはめ込む。無理をすると割れるので、火で焙ったり湯をかけたりする。

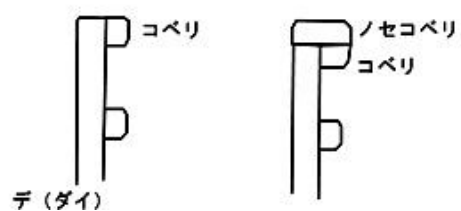
オリの曲げ方については、地域によっていろいろ工夫がなされている。

ミヨシとカワラの傾斜角度については、船の用途や櫓漕ぎ、帆走などによって、かなり違うようである。

トダテは垂直に立てると、追い手の時に、波によっては、船内に水が入るので少し傾斜を持たせてある。



コベリ（小縁）の取り付け



5-5-4 造船儀礼

<造船儀礼>

- ・ツノダテ : カワラ（航）のつくる前に行う。塩、米、焼酎を供える
- ・カワラズエ : 造船の最初の祭り、大安日で満ち潮の時にする。魚、塩、米、焼酎を供える
- ・ツツタテイワイ : ツツは帆柱を立てる台になる。
- ・フナオロシ : 大安日で満ち潮の時にする。船を押し出す前に山の方に押すことはしない。おろして3回まわって、餅をまく。フナオロシに供える餅は飾り餅2個、四方餅4個（祭りが済んで船を海に押し出す前に四方に投げる）投げ餅（進水してから投げる餅365個）

<船霊様>

- ・神体 : 男の子と女の子の髪の毛、サイコロ1～2個、1銭玉12枚～13枚（閏年）、塩、米
ツツ（筒）のトモ側に長さ2寸8分、幅1寸2分、奥行き1寸の穴の大きさに埋め込む。

5-6 串木野最後の薩摩ミヨシ型帆船（機帆船）

昭和50年代、新聞に串木野市の最後の機帆船として掲載されたとき、小瀬港で撮影したものである。過去の新聞資料を調べたが、何年だったか、見つけることができなかった。この船の古老が快く撮影に応じてくれたことを思い出す。

小柄の赤銅色をした船乗りは串木野最後の機帆船を操って、天気の良い日は沖に出かけた。同じような小さな帆船で、串木野沖で漁労をしていた祖父（南竹 善吉）にその姿を重ねてみた。この船は私が薩摩ミヨシ型和船の記録を残す原点となった。老朽船ではあったが、良く手入れされていて、舵や舵床、船体に補修の後が見られる。



串木野市小瀬港の最後の機帆船「昭義丸」



帆棚と前帆柱



舵床



縦舵



流舵 (引き舵)



下帆桁（ブーム）の固定索とサイドステー



挟み竹（はさんだけ）

あとがき

串木野今昔を起稿するにあたり、義父（畑山 栄蔵、1916～）には、和船の操船法や漁労、昔の漁村に残る言い伝えなどの話を聞き、貴重な資料となった。父は旧串木野島平で沿岸漁労に従事し、その後、南大西洋のマグロ漁を行ってきた。90歳を既に越えた今でも5～8月は長崎鼻の磯海岸に2本の竹竿を持ってタコ取りに出かける。1本には蟹をくくり、1本は引掛けハリ（釣り針）がついている。タコのいそうな海中の岩穴を探り、蟹に飛びついてきたタコを素早く引掛ける。どんなに海中が濁ってもタコの動きは長年の勘で分かる。また、複雑で海苔で滑りやすい磯も自分の庭のように動き回る。我が家の夏は父のとったタコを食べるのが楽しみの一つである。海で生きてきた父に串木野漁師の誇りを感じる。

故郷の思い出は忘れ難し、父（南竹 纓二、1914～1988）の遺稿集「思い出」と串木野の和船（帆船）を再現したいという思いが、串木野今昔を纏めるきっかけとなった。第1章、第2章は一部回想録になっているので、筆者等の感じた時間的なズレや言葉に欠けるところがあると思われる。間違いについては、お許しを頂き、ご指摘頂ければ幸いに存じます。

鹿児島大学名誉教授 田口一夫氏には、著者がさつま型和船の調査を始めた頃から、和船についての資料・情報を提供していただき、お礼を申し上げます。

宮崎県日南市「チョロ船」の資料収集にあたり、「チョロ船保存会」の河野龍二氏、川俣悌助氏には快く撮影や話を聞かせていただき、感謝いたします。

参考文献

- | | | |
|--------------|--------|---------------------------|
| 1. 串木野漁業史 | 富宿三善 | 串木野市漁業協同組合 |
| 2. 串木野まぐろ漁業史 | | 串木野船主組合(平成 8 年 12 月発行) |
| 3. 日本木船図集 | 橋本徳寿 編 | 海文堂 |
| 4. 日本型漁船 | | 東海大学図書館蔵書 (第 4 6 9 4 9 号) |
| 5. 大田区の船大工 | | 大田区立郷土博物館 |

参考資料

- | | |
|----------------|---------------|
| 1. いちき串木野中央図書館 | 鹿児島県いちき串木野市 |
| 2. 笠沙恵比須館 | 鹿児島県南さつま市笠沙町 |
| 3. うしぶか海彩館 | 熊本県牛深市 |
| 4. 日南市「チョロ船」 | 宮崎県日南市チョロ船保存会 |

掲載写真資料

- | | |
|-----------------------------|------------|
| 1. 串木野市漁業協同組合創立 1 0 0 周年記念誌 | 串木野市漁業協同組合 |
| 2. 写真資料「くしきの」 | 串木野市漁業協同組合 |

著 者

南竹 纓二 (みなみたけ えいじ)

1914 ～1988 年 旧串木野市本浦出身、串木野尋常高等小学校、朝鮮警察官養成所、沿岸漁労に従事、本浦船員組合長、本浦漁業協同組合理事、串木野市議会議員を経て湯之元船員保険寮 寮長、串木野市立公民館運営審議会委員等

南竹 力 (みなみたけ ちから)

1947 年～ いちき串木野市西浜町出身、鹿児島大学理工学研究科、博士(工学)
鹿児島大学で教育・研究支援技術業務に従事、(株)A・R・P 鹿児島事業所長を経て、川内職業能力開発短期大学校、鹿児島大学、鹿児島工業高等専門学校非常勤講師

(平成 24 年 7 月 一部改訂)
(平成 26 年 5 月 一部改訂)
(令和 3 年 12 月 一部改訂)